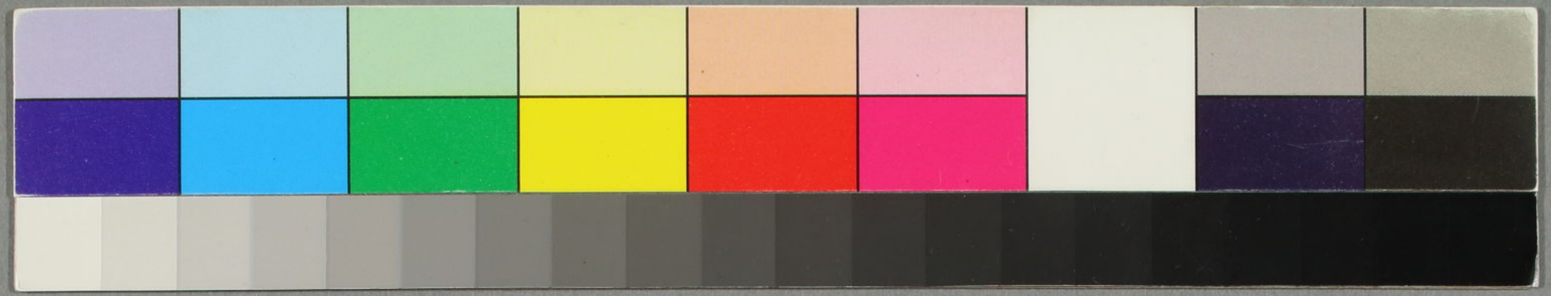

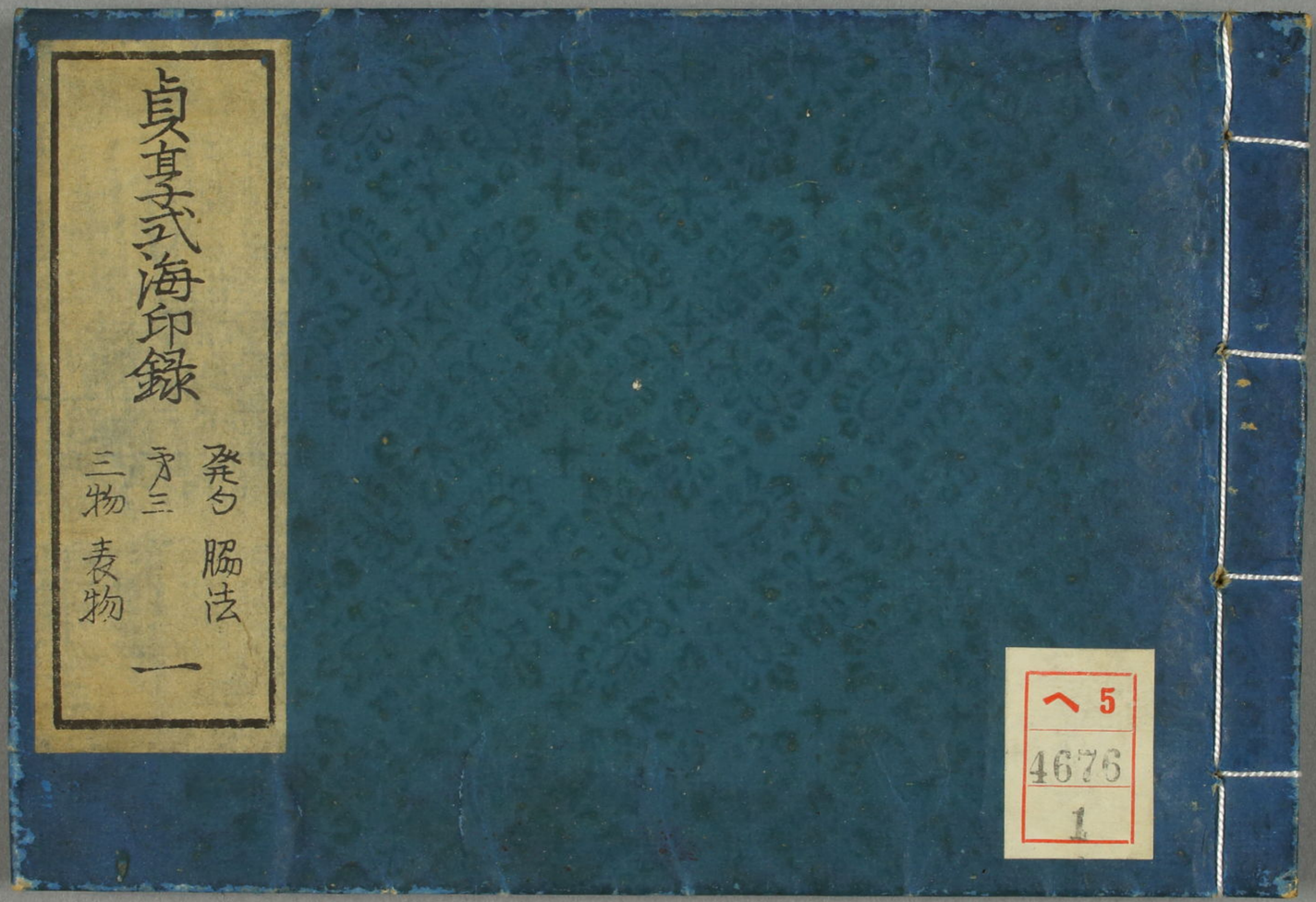

へ 5
4676
1

ヘ5
4676
1

茶一投
碗

青黒

自序

吾輩もし免道を明変り学て出し純中後やのみきつくし浪速乃一婦しも探印を拠て深川の林家に強し事遂に務をあらひ服をさらせり或とき乾藏を押て法句種を閲し森羅及萬像一法之所印言一法所謂一心也是以即攝一切を習出世間法即是一法界大總相法門體唯依妄念而有差別若離妄念唯一真如故言海印三昧也と云ふ人を汲て發起て濁らし君徳の吉奥我拂ひ更めるに清らる雲葉の正風を起せり徒ある處法制恒なくして人の

昭和十六年一月十一日
尼野貴英氏寄贈

傳に海ゆくみ似られと處もあるにたち乃
ありけりに遠きもぬに若く生ぬの月を
照して寄しく海印の幕を張るなり
飛樽舞をとつり五十条に弱めて古きを
二三子に傳ぬ事其事手一理乃通の
確論なれも之を伸る時を乾坤年
ひとり其の月日是乃旦より風に乗ひ
くせ雨に交る雪秋の木艸孔衰ふ
春の英々の靈なる四時の朗詠山水孔
奇觀神釋あれも應無常あり人皆
一を乃不樂衣食罠財日用の以事文
字て宗を彼の旅に至るとこの榮乃是
りよみとらこゆく演の真砂い手ひ諸孔

海にをさめ然い法才子古きを心ゝ尓
拾字して象象くの鑑としつるを照し
あもせて其れ所しを挑事変に矢真式
海印錄と号く人そし安藝是源乃
觀をなして蕉翁の海印中尓人を
隆しなれ彼ふ是尓の彼風書ゝし
古きいまし世に逆のわる祖所のかゝ美の
我列年其の節とも賴ふな瀬孔
花もうらあれいと正風復古の類を
起て同じ家に於ちくやと西方の風土哉
いまなふそのい周南敷の浦人
あ奴云未弥生　忠高

○目録

一ノ巻 発句 獨立柄法 第三言 三物 表物
二ノ巻 表不苦物 四句ノ 裡移 白巻挙句 奉納
愛起 追号 人位ト嗚ノ弁 支体 病 述懐
山乾 水辺 雑場 居伝
三ノ巻 意振 名伝 神尺無常 降聟風乾坤門
時分 枳分 時苔 四季 雑
四ノ巻 月 又秋 日星 花 植物 生乾
五ノ巻 墳字 不吐 字去 笹字 てにて 体云 用言
六ノ巻 数字 送字 飲食 衣乾 彩字色立 笑物
出体 火体 五ノ付 一字一点 准付 単子地灰
死活 一句立 両体用 粧辺 内外 禁物 並 要格
寄ニ浅しおい 流編ニ 綱寸

○引書

本出 貞享式 一名 九五條 又 新式 注
宛 九五条の口訣い先師の奥儀まで是を知さる

時に他所の為に可し世に執心の人なきゆへを
先師為に頼まひしに
星月日 新式い矢字二の去晋子頻に一流の傳目を
授ハ七むるを印むなに御工業成て同日の背
前自筆にて授与あり其后晋子前に後て
八条目を作れり去来い情補して四十八条と
すえ祢七の条晋子去来に御儀し新式の
闕漏を補へり来後の門人此傳出あるゆを
考へて支考ハ偽作之といふ大なるひゝ云々 文約
▲両補出未見すさて許るゆへ之祢五に御傳の由
あり其后篇実宛法師ホを惹せり支考い
元祢八に去来より傳て后古今抄をあめり今
抄出写さて世にあるゆ本出い去来傳の侶を
三、尾の文庫より写弘めしおくに此に傳惹
さる人い偽出とも云ひむ抄するにキ角許出
去来の傳出文句各違ひ其精なるい去来のこ

それは文中に元禄六の冬の炭俵に引句あるにて明し
キ角のは冬字なれば同じてこの名もは ひきこの稱も
なきなる巨しては補はむさて流布の本出皆
爲正字にこの速多し
秘出要決 ▲白砂人集に出たり元禄六の十六箱より
許六へ換与の出なれども書中に古式のさてこそ吾
家の式なり辞の法多なれども其比は古学未発の
時に切字辞仮字あるのは本出にも用捨多し
誹諧三ア出 ▲書毎にもせ残在者とし奥に宝暦
九発行とあるのに序破もなきは出雄の口さまや
大方古式のさてこそ本出に反すれば用なし
捨の一代宗 ▲枕青芸ヒトリ 上書に付句の法あるは
つとよし去嫌のるがあれど古式の字なれども
用捨おこ下書に辞のるあるは例の法に反す
○芭蕉後。去来抄。猿蓑法 去来述 ○篇実。新に式
宇陀法師。花葉字 開東問答。浪花問答 許六述

○本出口決傳字 古今抄。菊松宗。號五法。十法。好弁
東西取活 支考述 一巻傳字 ▲支考より慈升傳ヒトリ
他社の法は是体なれども奇異のるあるは皆非に
後人さらしを加しら字傳おこはさるる多し
○小枝考字 ○厂木傳字 竹箱 ○ウヤムヤノ関 高厚
○三冊子 土芳 ○独立 東美 ○令云 祿字 碧元
▲此号皆名称人の法ひし箱の遺訓にそう中に
未説ならぬ不あるおい補ひ又其非なる中も
いまでい人の或ふらむるのあるは其にしらさき
不とを峯嶺へ准て其非の志るきるのともい
あるてそしつ此外極秘傳抄 寂琴木の教
数多あれともあるは古式を廃し或は字書の速
或は信説の称或は難陳の法失ホあるおも此
次きに弁翁せまりしれと雑なれば暫止ぬ
何今何人の説にも心に照して理に背
らしとるに於ては先哲の遺訓なりと

○北条注 ▲南更著 注未詳 ▲ 支考俊度の句 ▲ 文著 注未詳 ▲ 我の
中ごろ支考俊度のごとき人々 ▲ 文の字余 ▲ 之より口
決も未だ人と交えず ▲ 白雪 ▲ 儀範 ▲ 出 ▲ 者も限らず
古乃の字を従一位の大うまし ▲ 行旬出 ▲ 頭の注
推考のごとくに出 ▲ 字作おを五行ごとに ▲ 未中ク
注も亦字余多れば ▲ 行て宮ごとに記すべ

初蕨出席者 お集再出おい下二集名字記ス

巻印 ・白昌 ・母 ・中旬 ・ロノ ・ロた ・ま ・カ仙ま括
・半 ・書仙 ・カ仙無印 ・落おハ 七八十十二ト 記ス

延宝五丁巳正月始

一 ▲ 若葉 ▲ 式梅よ ▲ 年も 「梅の風」 俳枕 百
俳枕集 ▲ 初ゆとるか ▲ 時いるとてふくと ▲ 汁、
恨かな ▲ 歳序ら ▲ 小亭い ▲ 変のむ、
おのそも 「風ご ▲ を秋 「風」 俊セん、
呑れクう ▲ 都の 「まもようおよ
実や月百口 「捨ますていさ

七 一 ▲ さつくやる ▲ 子ふ ▲ 夜て ▲ 高ふ ▲ 俊よ 百
古拾 ▲ 名舟来 ▲ 俊ふ ▲ すむ ▲ のる
八 ▲ 薬 ▲ さけふう ▲ 二月中旬 初茄 八
天和之年始 ▲ 跡の ▲ 雑作ク ▲ 強そくて ▲ 中
次句 「去ぼふと ▲ 稽ふ ▲ 世ま ▲ 京ふい 百

三 古拾 ▲ 吐ささそいの ▲ 城 冬乃雪
武蔵曲 ▲ 狩とる ▲ 白 ▲ 生舟や ▲ 梅雪 俳枕
みの ▲ 胡ま ▲ 柿ま ▲ 木瓜も ▲ 京ふ
さろ氏 ▲ そこし ▲ 月のおや ▲ 茶印 ▲
三 ▲ 今宵 ▲ 花ふき ▲ 我阿 「及ふの ▲ もく
古雪 ▲ 古句人 ▲ を おくやふ ▲ と
天和之甲子 ▲ 初白風の ▲ 初ちのふ ▲ も ・ えり
冬ノ日 ▲ ふて 「生 ▲ 炭美の 「野月や
芭蕉 ▲ ふれて ▲ 心の声 ▲ 白し 三
三カ仙 ▲ 抱わす ▲ 春の時 ▲ ふ月よ ▲ 俳
之狂句 ▲ 時の梅 ▲ 芳 ▲ も ▲ 春 ・ こり
ハイが ▲ 我 ▲ 支 ▲ 甲 ▲ ラ ▲ 俊 ▲ 大 ▲ ほ ▲ ヨ ▲ 出

元

草 花を折て友者 ・イセ
　　何とやらん〳〵と有のむの
　　おもふ事ども有やらん〳〵 ・ヘリ三
拾遺 杜間ちくを隔〳〵 時ち雪を西ゟ 「金葉
　　雪ふる夕 思ふ人の木ずゑや 月の梅ゟ 土二
　　振袖式 涼〳〵さのさゝ侍るゟ 水車 百・ロ戸
　　野の雪 口の雪をさするゟ 野の雪の歩ゟ、 「初陰茶故
拾 久〳〵やあれくゝと初ひゟ 二
一格 花見て七〳〵 野ゟる 梵ゟ
幕 時鳥の聲を聞る 西日うれま
　　〈此句カシマ行ノ月北阿弥後ノ杜ト云ヘシ白雨ノ十
句落 時の秋 「江戸橋ま 時ゟ〳〵ま白
拾 冬ゟ事や人をゟめ市乃抽ま
雑之葉 わび人と雪ふまもむ和〳〵れ ロ
相笠ゟ ——人まやさし雪の雪 ま・ゟ
衝 来ざいます 「里侍の園を
松白 なあけて雪ふまる 祇衣ゟる 樹

冬 風乃雪ゟ雪ゟまいあそ〳〵山 ま松白
雪巻 廣雪かくゝも 清〳〵雪のむ
冬国府 降〳〵や高雪の比乃ゟ羽ま
拾 笠松ゟ人もあゟし 「雪花
仙 仔の米乃ちゟあれぬ白ゟ 〈イガ城ま ・イセ
紙布のぬゟゟをゟむ乃のむま
一幅ま
〈吉史 ワカノウラスマアカレ来ムウミ ・迎白
ひゟ白のゟゟ紙ゟ雪ゟ ・江戸
草庵 草庵の中ゟものひ文ゟ〳〵 五・ミノ
拾 初秋やあゟま田の一ゟゟ ・ヘリ
秋日 栗ひえゟそくもあゟま芋の花
元禄元戊辰九月改 〈改カヲ使てゟう更科ゟ 「江戸入
カシマ紀行 白菊ゟゟゟ郭公初音 ・江戸
杜若 月出そり打ゟむ村ゟる、 ま 「ほと
あゟの 丁ゟまも静ゟきけゟ ・ほゟや
拾 ゟゟゟ 「雪毎ゟ
純公ゟ ゟやゟる雪の下ゟる 及ゆゟま

二尺　生初め二尺の注きを生の字　未全　俗
半腰紙　れ仙ぃる万ぇ　ちを仏ぐぅ
去る秋　衣契して梅段。　白ぅ万　当字若
夕テ衣　仰ちの手肩ぇ　ちぅ紙衣ぶ　「紙」下史
当九　袖お一人を聟のぇ　ムツ　当九
俗表紙　風間のぇ　あや更への田植寺　「俗」
夕テ　隆多や月ちぬむを新の栗　「俗」当羽
拾　海さを多有　「新」ぇ　「聖」と看許ぅ　未　エチゴ
当九　ぇ月毛を　「すしきや　「カバ
む指　ろぇ多　ちをかをぇ　お多め　当九
初茄　陸しや山を出初の　初茄
ろぇ山　おつ山や次浦ぐみて夕涼
当九　文月やちぇも　「聖」と看許ぅ　未　エチゴ
表紙　秋空ぇ一ま毎ぇ彩れ瓜茄　「カバ　当九
「セミ」　ちぇしきぐやお花ぇ義務　「全」
「印」の三　めれてぐ人も　「おおむさん茄
「ダ」花　ろぅぇてをも点ぐぐぅ　紺辰

枹白　雪雲ら鳩次ぇろ川街ぅ多　ま　ミノ
七　ぐぐ芦ろもをーきくのむ
拾　ろぇみ葉も一刀の白ぅ多　枹ぐ　「カ」
萩枹　一泊ろぅ多萩の　名　イカ
「神」名　ぐぇぅもをあぅむみあれ　「全雪清」　イカ
他　暁や雪をすきめく葉の月　ヤ
雪家　雪ぇ今ぬやぬ斗の空久多
舟ぇ　後風ぇちの多ぅひ当ぇ　未　「全」
〈十ラぇ〉後　ぇさが城ぇ又後ぴぅイカ
壬　ぇろ乃ぇ後ーくる　枹ぐ
みの　木のぅ一け多祭ぅさぇーふ　枹
風ぇぅア　「印」ぇ　半二
巳ぅ光　枹半やむの雪ぇちぇ笑ぉり　「夜」
ひさご　木のあぇ一け多　「ろ」ぇ　・全口
「廿」ミノ　市ぬれお白　あく柿のセト　〈知住虎八
アメ」子　杖ぇそ千九　「ろ」ぇぅぐ枹の　ま
夕安考　月ぐ今る座ぇ笑ーき白る

芦　蘆の初ものゝ刺ぬ初ものゝ
拾　引起すまゝ引ぬきの蘆抜
文徳　まだ穂をあらやまいもし　△ママ
芦　柿ありおもうの柿のまゝ付　△ママ
仏　ひくゝとよる初やさゝの雪　東
芦　芦生より二里こえる柿の枝　五・ホ
仏　掃寺こそや初秋　河州の落て枝や　ヒ・ヒ
蘆　あくと出てはきよふ月の雫　東
半　半舎一枝の声よそ秋の風　楢
集考　うるもき柿のお蚤の加ふ　出
蘆花集　そゝぬ花ゝ吐白と芦のやま　ミノ・ヒ
柿人　水仙や白き障子のうつり　土・ヱ
茶冊　芦白柿ゝ白一　水仙冬　ヒ・ヒ
柿白　ゆくゝ山を宮やそこゝろ　△ママ
白嘯　芦や焼ゝ人する　△ママ
蘆花集　水ぐるやいお西のはし二股七、　仝

未来記　奇のまゝ柿と柿や芦の焼
蘆葉　鈴ゝや秋の明ゝ一雲乃空
寸文庫　惟ゝをひく冬一筋の声
芦白　初茸やまゝ取ゝ秋のゝゝ　楢
柳門　青ゝも刈株や焼ゝ秋ゝゝ
句会　ゝゝもう人もまれ初ゝ
宇や　柿ゝゝさひよゝる雲ゝゝ十
柿白　月代をゝく去風ゝゝ
柿実　ゝゝをゝめを柿を吹ゝそ
句見才　おゝゝて冬大さゝれ柿柿
蘆　雪頭悴りてゝゝむまのゝる八
　　雫のゝゝゝの「今ゝ押ワ
猿蓑　女人ゝちゝゝゝゝ序ル
猿笠ノ　八九ゝ雪ゝゝゝ
柿蘆　柿のひ宮ゝゝゝ
岩炭俵　ゝゝのひゝゝゝ
柿白　名月やゝゝひゝ

炭　抜菜の一夜　露の松　拾白
与十　芹摘や路ワの田井比和ホ　ま露
主峯　主峯や小ぬかのうる　臼乃傍　津をさ
きり谷　すゝりて一ワをねる　ふすさ
佑ホ方　いさらう鷺り戸る　霧る　全
梁九　――――――――　嵐は
坐　きくろや家年の礼ハ星月よ　八
炭　梅くりそのつとりの出る山路は
与十　幸のゝ露着よ　風流の傍を
翁住吉　あちきなや　霧を小夜のお産哉
小文　秋来の門さとすきあねを途は
殷日和　水鶏なくと人のくもや佐々伯　△イカ
梁有治　年家寺　村のさハきや入月哉　・夫り
砥並山　鶯を加さすく　風に座を下け出　・京　羽川
市庵　梅ちり行ゑいすゝし　和吉葉
拾　夕ぐれや つる々傍をとる友住哉　二毛
梁九　霧の夜や暮て明し　渡お　・毛白

名月　秋まきんの名るや風そ夜半　・イカ
吹の青　あれくて末い海面く也るは
主　稲くとそくき来　稲る杖し給　ま
みせ尾　松風よ秋風をすまる　松かさは　ヰフ
梁九　さゝらのまもれる露の松かさは
他　松葉や志る木末の今そり付
大坂寺　――――――――　稲も年き　山乃形　去
住吉樂倍　弁当て今年うるゝ月見は　・大坂
他　秋の秋をお歩くる　此はま
貞使　此乃や申く人よくし　秋の暮れ、
菜蓑　白きくの目よ　出てるちり出も
蓑紫他社今葉補冊を一席ホの集冊各謄乱あり参
考して番衡を加くれるもれ後志する者わかるむさて
左ホの出る為一世の志を捨られと為緩秋為むし
帯ぐれまき考るる法ある文字を出揮よ稀ひまもて
揮で世よ挑む 出字子のも希信る文字より享保
の前より出揮の出多有れるゝ今求つゝきおゐて謹白

ふさきおい又補む文次を法男の格空をる加すれ
ばれくは詞甲ニ吳又あ〜むるい者ろくう〜
門人名・お三あ・表・多趣寺・力仙・去七寿・合夜合

[頭]二丑 去日 左ニ 就人
三才 一橋、十法風
巳卯 猪毫 合ヒ 角
[又]祝之辰 猪の柔 カ五 不ト・二已あ〜
三午 ひさ 、ニ 孫破
文代伸、七 嵐雪
十八 、土 百三 示右
巳未 雑談集 カ七 角
更琴、六 支考
五申 保 、二 西吾
六酉 松実、二ま九峯
七戌 岩炭 、三 百一 建妓
猿尤 カ一 沾ホ
多注 、巳子サン

秩山家 カ一 キ角
遊京 百三 、
カ九 荷号
冬梅、六 角
葉川笛 合五 牧童
カ三 之乃
アメ
多辰集、三 北枝
行脚戻、五 源竜
萩秀 合巳 角
白兄 カ九 、
拈花 百二 、五
為実 カ巳 素丹

[頭]伊吉 カ二 書像
八亥 友 カ八 考
低 、三 浪化
行状記 合三 汤通
九子 小文 カ二 史邦
十丑 台門 百二 、五 枕り
土寅 野白匂 、一 考
西花集 方芸 、
多胡 カ五 芙花
土卯 柚のさゞ、巳三 性
朱巻集 方四三 考
土辰 梅山伏 百二 、
久〻萄 カ巳 杉風
六巳 材表紙 おニ 吾仲
ムノ巻 百一 カ二 乃子
六未 ヨノ狂 百二 宇中
百カ仙 カ六 天垂

[又]祝之辰 猪の柔 カ五 不ト・二已あ〜
三午 ひさ 、三 孫破
文代伸、七 嵐雪
十八 、土 百三 示右
巳未 雑談集 カ七 角
更琴、六 支考
五申 保 、二 西吾
六酉 松実、二ま九峯
七戌 岩炭 、三 百一 建妓
猿尤 カ一 沾ホ
多注 、巳子サン

句 カ七 許六
遊猿 、三 角
ナん巳 カ一 程文
小弓 カ三 東鶯
猿ミ 、五 化
猴猿 一乙孝
皮古袴、ト 芳
一幅 ■ 、

無尾琴 カ巳 角
射水川 合巳 カ三 十丈
上テレモ カ七 月羽
狼化唇 、五 秀
百一

十七甲申 枇杷香 百三十二 木因 新耕子 百三十二 角
白タマニ 合四 従吾 山中集 、八 蕊
キワ 力三 岱水 渡鳥 、六十 卯七
三正サル 百三 考 千鳥塚 力一 除風
二万 三日力仙 力六 、 春ノ麻 合五 曽九
三戌 東山万 方百四 、 汝とゝ 力十 蕊
百鳥 力五 中 後橋伏 百二 一 斎十
四亥 市ノ尾 力二 堂 尾ノ祀 力五 高川
十六 仙 百一 考 四鳴対 、四 東姫
五子 越之鈔 合八 方十六 、 枇杷人 、四 柳士
夜衣 力四 、 東云風 合四 山
六丑 白雨集 合四 方六 、
八卯 東山宮 百一 白狂 タツウ 力四 狂
二辰 ツルモ草 力二 左角 キチ千万仙 伯名
四午 山琴集 合六 方十二 巴分 八夕鶴 百一 乃高
角 力三 知足 七さゝ元 、七里冬
五未 発教文 、一 草二 梅ノ香 、一 仲

六申 ブリ俵 力十 竹司 江戸銭 力廿三 沾洲
三戌 三月塚 長一 彦元 ・五子 雪ノ光 方二 百花
六丑 只日力仙 力二 仲 ・七子 夕良 力五 田入
八卯 難逢百 力二 ツ守 十七巳 百五 淡々
シ和 力十 二 労夕集 合九 六之
九辰 三千化 方百 、 八ノ宇 百二 力二 佐里
十巳 通金鳥 力四 千梅 黄山評 合三 童平
十一午 本郷八仙 、三 昇角 梅十詮 百二 力十 二
文月集 合四 嵐枝 八多整 方百十二 力十 坡
十二未 高白河 力七 力十三 九 初茄 力三 呉天
枇杷金 長一 夕九 元 鴨矢立 、四 鴨笑
笠松集 合六 連支 文操 合三 二
十三申 其飛 力三 葉園 ツクモハ 、四 イ吹
イ七行 合二 二 風名月 力三 昇
高ノ梅 八 力十一 風艸 門司祝 、十 力六 祝十
水仙傳 合三 杏子 キシシ雅 力十一 高月
十四酉 市ノ海 力三 孫士 若良川 夕四 長一 有琴

以下に挙ける引書は。名の侍るを。

二□引書之又後き歌出りと切て五梅を読う
引書と並て▲を入侍くものる五梅也但五梅の一花
をおそうくして下を考く

二□大部分〈小部分之其部下ニ〇ある六の等ニ
変格ある下に下ある多侍を等く歌あり
句切は□ある其部の句去ようをきおも
一部下は七下書多侍者と出てる大方の人社知る
るあれい侍ら挙ふ古侍まとあ〜ふんのるく
一句切は二句の之後丁面去ⅱ下お去ⅲお面おの下
を入ふる大方力仙之百句い辺ⅲあ〜ふ
因云力仙のお付ニ二オ三ウ源氏七十仮ニ三オ三ウとやく
も非之五十句のらまおあれい方とやく〜又始平仮名
そ。トカい二おふ。ト後をふ平あく又表いオモテ
あれいヲ。とやく非之さて古来強調を名おオウ
侍おあれい後。ド未。ド改むむ却て名残ド其ふ

終おとは其名の殊なる事之煩の為を名殊に云ヒ非
之但初夏なれば名殊に云ヒ其人
の姿見ゆる限之姿隠て後は名殊ト云ヒ
一長短出し付句之中を隔しは長短同寸に出すり
又部分に或は三去ト為て引句の月に下書き
皆三去の例之其中にて二去凡去の句あるは
月に二凡と下寸面去ハ皆此下あり
一注の中に「」の限あるは本文之侍に一○●△▲□■ある
も要文其余の下其所に弁あり
一凡二去のおは尤に本所三去おは四五五去面去おは二三
おは去おは百句にても三に下寸 本所おは面を去て百
句に八おを去て凡トあれとそれ大意の後之
一若より季寄の得に出せる去極出し古式を写
侍しおなれば高用終多し今席上の仮
に此書を抜華して掌中海下録に於
書を其意にくり

貞享式海印録一

曲齋述

□数句に切字の道理あるべし

[本文] 本句の切字といふは是なるの心之中略仮令切字
ある本句とても心の切ぬ時は本句にあらず「桐の木に
鶉なくなる堀の内」此句上五モ下にて心を隔たる之
傳云万おは一に始て相対する時は二となる其一は名に
起り其二は実と成て姿を備ふる之

[古今] 切字の用といふは相に対して是なるの文之事は
是なと詩を明て相を二つにする所に始あり終
ありて二句一章の本句といふなり

▲切字トハ古来俗習の名之甚つに切字にハそのを
裁きる事なり一句の中詞滞て極との余情を
含む処をいへり然れに強て定なる文字なし凡
俗云もていまく此字もあらむ事を辞(テニハ)に持セ余
情に包て十七云に弱なる物を本句といひ只句面

に敷たるのことにて余情も無言もなく十七字に
事言たる物を本句といへり実を仮令切字あ
る本句とても心の切ぬ時は本句にあらず只仮切字
の事に勝て重事なの法出多かれども其社比を
法師の学裏し時なれば務しきるもあ見るを
詮原稿のお異れてより今も初乃山ふこのわら
はへも独千代の古乃に分入へき時代と成ひまい
其琴を伝へし世に伝説平話の俳社に和哥
の辞仮名を世用の物好といふ人もあるは歎き
事之俳社のきりし寂しといふも皆詞のあやのこ
なれば須臾もはなるへき乃なく特神の法國ホ
生て玄昊の幸をふ理に聞きていと悔しきす
と思起してせちに心かくへきことにあれ

△本句案やうのこと

本出 本句を屏風の直と思ふ一一巳の句を作て目
を閉て直に准て見る時は死活自あらはるし也之

此故に俳社は姿を先にして情を後にすといふなり
都て本句付句ともに目を閉て[illegible]眼前に見ゆる
所しかに量てするに見ぬるの推量也
▲武陵は実家に叶ふが叶はきるかかおせよとの戒之

為弁九 若し眼界に只今の姿を浮て丈を其儘に作
まるなれば昔の世乃古らぬてく其句は其日に新之
家学の目を書く時は唐玄蕉の出物に見える詩の
体の哥乃様のと昔より言伝し上手の本句の形を
成て一字も只今の姿に見えずかくても人のせかれ時は
詞の切屑を記集て上手の独立は詩に及いさらむ
▲武城老婆心切之俳本句に種々の心得 篇実 旅
操詩 素材 三冊子 ホにくそしければ実に畧す

△巻頭乃事

宮陀 百句の巻頭なるに乃ちまた句才一之平句に延る
句ある時は本句見落さるゝ之本句は大物の位なくては
巻頭に立す平句は士卒の傍なくては託して其用に

立す陽日也おかの句は取合物と考へし既の中より
出る句はときなれば勿ことにて皆古しとやされる
根本百句 ・涼しさの瀬砕るか水車 清風
鶴 ・日乃すちをさすりに鶴の出かな キ角
樵山 ・山伏乃山といひたや山さくら 仟六
八夕 ・夕くれを降るやきりに柿もこち 茅三
難 ・雲に鳥乃手に滝や樵かり ソウ
牡丹 ・風乃一日吹てをりにけり 固友
桃香 ・先生や各笈そ桃の花 木因
山コト日香 ・名月の雲にひくくや葉門ふ 音吹
奈山万句 ・そもそもも苔の下蔭見る世ぶ 拙行
三千 十カ仙 ・柳くに迷ひぬ路の岐かな 文茶
八秀 百カ仙 ・鶯や古蒜風雅乃路を 杉風
▲生ぶし前説のとく百句千句乃句本勢のたかかに
よりて大物の撰あるべし若百韻のこれに千
韻を但し其耳是等是らくむ

□脇乃了

本文 脇は右のかりと句字にてとむといふ先は初心の表
にて定字の心にかくむ相之至この名も称うし去の茶
却れて懐の目を見しぬる此句は始て俳諧の名目を
見る人の俳諧の名目称けしとて或ことをいひて尓
一様を与られて懐の目を見しぬる不一句相対して
つきの体とあれば句字辞の論文もあしとかくも
脇は右句の余情奈色の面白くある根はせ脇の勇柄
持たるは脇の心にあらず口伝 秘下 右句は其の位にて脇を
字ふの位あれば已ら心を出てもなく句に云残たる
山川茶木の一字二字の風情を加て其の余情を見
すべきこと此脇も懐の一字にて見るあるく根を見るべし
▲ヒサコ 之この名もむかしや去の茶却れて懐の美を見
ぬるトアリ 三冊子 は此去の通なるを考へ瓠の方先掛て
去は再掛之むかしは方なり称すしは方茶の姿にて見
爰ヨリモ目を見すは方称たるべしきよし

偶云稱ニ句字ト云事ハ必七ツ〻の稱をいふ限ニ付
意の對する字をいふ之稱ハ付句の始る所なれハ寔を辭
にて留る時ハ再一その振に成て二句と分ゝぬ故に
字にて留る之此ハきも某に除と對し覚字意對
して句字恒なる故に辭留苦ゝ手とし
△句字トハ古風にハきの留字をいふ俗習の名目之前ハ
其名を仮用て本句の魂を云歌寸脈字汀語の名と
せられたり是を偶に「意の對する字をいふ」なり其ハ
古風に云ゆる詞を仮て意の遠ふ所に用ゐる事
多なれハ文によりて両義に吟分る事あり　さて
辭留ハ互去ト限生ト辭ハ虚体なれども未来ト
云余す辭にて留るハ大方逆付に（おへ口テツクヲ云）すると
志ゝせさる時ハ意余て平句のごとくなるをもあり
謂句の事……の事を分益なり
□偶能の事トハ太史をひとして稱を也相言に至る也
太史を貴するごとく本句を稱して貶るをいふ又世に

本句ハ前のする物ハきハ言意の付る物とんなれと
稱ゝ付本句ハ客位稱ハ言ゝ立位といふ句情の事之
【案】されハ客と成て其目の皆悪を口にいふ手ふの形理ハ
何となれば人に能通て温和に志ぬ良なるハ一句に
人を余しる起字の風情之言ゝ已ゝ人なる手とも
前の人に忍て口に云さる和を推尋て其好に陸たく
客のよしあれ言ゝ立に言ゝ如む是ハきの人之（狗文）
△本書に自柄ハ本句の一字ゝに姿に立すして稱者自
己の情を作るを以り鶴答祝退善ホのハきに主客
向合俗談するごとく自他を分ゝ力柄にて稱体に
あり手鶴答トハ互に挨拶句するなれハ稱なくても
鶴答之一方の句に稱せしのこそハ鶴答といふ手
答字をハきもて返答する人と忍ふ非之相稱ハ
謡一ツをシテとワキと二人してする人の名なれハ客に
呼ふ言ゝ立丈に但する事のごとし偶に本句の意を
汲て意色場和人品言語の姿を立句立の自句に

作て付添る事にて二句合する時は一件と成枝す時は
おことゝあるべし此所は挨拶句に引更ぬ他人の
稱するも作意なるゆゑ挨拶の意は前出之にて
つきに至ては只のわ句と見るゝ發を包物を祝義
去産あとくいふとく前出は包紙口上にてわ句中の
品わあれは稱者の手に渡る時は一変して包紙口上は
あきあるは只其品わを發ふとし又活花の正人は
添枝するとく今一件にて發きわ句するべし此所は
山川草木の風情を加へよはり志は祖翁始て立ふ
法あれは古風とは遠ひ不謂矢門にてお對稱は
変に嫌ひる身柄の事と申すは古執の名称をさる
ゝ翁の門に入あるゝも翁は身柄稱せし人のあるを
翁は俗の徐て智す座例にはは許されもあれは其
宜あるを撰て謂とせよ下に挙る「」の句はかくて
稱件あすと仮に作設て其惑をとく蔵草の口さ
之□の中に二三云を出さるは一件ある付方の事之

さりあらゝ稱に件を口さは百千とも限あらむ
りを陸教得翁して只一件に稱て懷にせむ事
皇者の家とする下にしたまむ
宛 本句三月に渡る季あるは稱にて其月を定むアー
秦抄 去来 寒思のわきに「梅に雀の枝乃百生」とし
とるを此枝は二月のうしきと評しおつり 文約
▲梅は正二月に渡まとも作によりて手始に云あれ
季の用方変をもて自知しむ〳〵
ヘツキ 賀 挨拶 追善 懷旧 記行 移徙 餞お 留お
神祇 尺教 恋 賛教 前出格 古実 古弄 取格
右ケ様の景常式 花鳥 風月の桜 雨とは格おく
▲此教 翁は情を許するは其姿の云たらぬ事を其景
物出の保て助る故へ さるを稱する時は其云たらで
平句にしきれを姿を添て補ふ事稱乃不論之今変
にあらず連俗は此景教を考とす凡此号の句も
稱もて情本句を姿本句に仕立事すべし又其の

花をこ風月の句は自撰に独立しられ一家を
除てなる句の位をすり上るを稀の但とするべし

△謁陟

色こ乃名も務ちし妻の草　陳破
おきて嫁の目を見しぬる　莉

なる句は俳諧の務を問ふを稀者は只草の句と見立立こ
の草乃務を尋逐ふは何ものかと何ふに人にはあらず若
料の上をひらく花見る嫁く其嫁いかと見るに人
尚に名ふは此草なる寸やと止むとするもつこに続き
草に深れてもつと立上てり是其務を自得の姿
と名ふて おきて嫁の大付さり今是を合併付と
写るは本句は妻の先出の務を名ふ情の句にていて
云ふぬ所ありて平句に至きを其名ふ和を嫁
と定草におきてと詞をうみ稀を合て一句の
姿と成る故に是へ云ふくも尋ぬり妻の料
ト姿情備る句に位事すらとし是は中きも

うてはおてふの目を見しぬる
とする時はうの和は枝の扇とありお人は箱の方柄とあて
妻草は姿立たれは平句に僧人稀の所作を共なむ本出
に此一句を謎に捉ふは続て併家留辞留の詩乃こ
なる手かる接拶句は情を許すおなる所に得ていおの
情にかまれて方柄にありたれは其式を剝むれは是を
二三子に遺訓しむり尚門に方柄を嫌へるは方柄
にそれ勢ありて以なる句一も通ひ定学の人にあら
ぬ故に言ふ今も古風とは不知くまゝてうる句には

とう妻に探らむ虐むれの裏
猶いやうて　あけなのく　空

あらく自他僧道の詞をかまへ乃の深意を問ふる前出に
尚或て本句の姿は見立す其人をおむよか自然但よか
我を見たよか偕に呈ふよかいふ人に作ては不辞義と
名ふ人もありなる句の姿を更さるすそふれなきやき
の辞義とは句立に低改する詞を作る事にあらに

奥底元ありて冬木の梢ゟ　露川

小さるまそ乃うこくみのむし　翁

初て翁にまゐて頼ある数を喜ての挨拶之さるを奥底ありとはあり果し裸木と見立其梢見てすく中に目ゟ物を見出てかく付たり今先を図付と号るは句者の気に拘す只乗乱者と見立て拠する所之常人ありは何一つ書き梢あれは降わり者ありとよすべきをこのむし一つ残る姿を見出し小喜に其を助せるは枯木に塊を入るゝ姿を限し

「くるくも志ぐに　頼日のかけ

と已ゟ物語の心を述るは勿柄之依今世人を当然にすといふ修徒あり他洲は詫わ比奥あれは彼をもて試をいふ意之陸硯を嘆ふ比するにあらず自ゟのむしにあるにあらず只喜仲冬木の姿を立るのこそ仍令当為といふとも其情其時の奥あれは何の当卑ゟあらむさるを　評註　我方を強退しこのむし乃拍ある姿も君ゟ嘴の小去の得に其を為すといふ拠之」此は何の謂云そや仮令露川を当者とし拠は強辞を述るわもせよ此另ゟ人の一様に助さるとて君ゟ嘴ありて力らくも祖翁を立汚ゟるは瓜得すべきなり之千代の俳十歳或へり只是を見て涙を流す者はなそや

哥

きよれは山又言し里乃月　風雪

砧に浸る老らかべきあし　其二

青に学しよりも名人之と称する句あるを山里に住ゟる様人のコハ却て辺地に入りと傍見出す様と見立宿求めむと砧志るへにたゞり来つるにさる事ゟも見て伏家まそらあるいつこに一枚を明さむと月々に眺る体を付たり是も図之

世に捨られし　其の　和宗

とせむは私之えより山言し此山のゑすあるを已ゟ蓑能と引文て強るは却て当れある故に当門にはお姉付を勿柄と号て戒ゑくり

[答]翁曰むかし先師老人探題ありと云れたまひ
とも当時は古くなりて景気を慕ふるを宜とす
▲古く成とは従容の花之其所の中様なお好探の
誠を含みり又景気を云ふ係ハ上ていふ[定]の事
之元探ハすな八九ハ定立はそてつくし此者中々に
似作くと思ふるも大方ハ定の中なる不易名之
[三冊子]昔ハ名ある挨拶を発句の探題をすゝく交て
挨拶を付たり今日探らるゝ句をならべ良挨拶之
雪月花の事のみを云ふる句まても挨拶の心之文
▲只翁ハ挨拶の句に只景気を云ふ探あるを古風の
挨拶と悟えて雪月の事のみいふも挨拶の心ならむ
名ある所に評て出るお之此翁の工夫あり
皆皆あり自己を評せらるあり宗匠法師是非あく
又後人のさかしらを加ふるあれハ此に案とも

△客挨拶

三　櫨木乃花にかくされぬ峰名　翁

家する物を見よふ竹乙鳥　秋風

花の中なる桜の姿を見て花の都に住なるる世に
あるぬ陸色を持してる只桜の也に半ある一日の姿
をも全し夫を花の事にて南し云ふるらしてかしの傍を都
をき極たと定くり是を[幾足]付と云く此後亦良し
美巳ろ境界を答られてと思て陳り

「―― に据す ――　此ハ私之

かきつきて我に発句乃名あり　翁
変様作も　僴然　来　知足

(詞)

其跡の一系を借て連ろ池の足跡に孫猿の皮
あすけをも運字に花の色を染めて我になるの名へ
とおもり[ ]詞係に候に只其端を結んて此付
方附合まいと多し　さて客もそかしの心を述て

「矣立はそれも夜の伏の此ハ起」

面白し雪やなむ冬乃西　翁
水をたゝく田井の大路　良吹

面白く打眺たる向の一系を添たり大字尺ふ之
「雨」をたくく尾の七丸 茶 氏ハ私之

笈

山張や身を書ゐむ爪畑 翁
石井の水うそくく帷子 蕉楮

只実系之稲ゐ山の城迄ハ古井あり其辺爪畑にて
山の茂いと添しよ身を書ゐむ氏ハ添を乗てくる
指とる金苔清水汲上てそくき持る深きりきを
爪畑ゐけて見る樹下の伴を付たり

「杖」止たる三伏乃比

といたく身柄持てうらく敷よいかゐる句も清ゐむ

花故

殊日老者ゐ手毎に彩理を爪茄 翁
短さまして杖乃日の丹 一泉

手毎に開き指より短日の伴を見出たり

「峯」寄たる椽乃夕月 氏ハ迄之
蕉しうき世話小の山樹 翁
雪消殊る神根大根 勾宜

浮世の裡を蕉むに氏ハ菜根を咬て百年を寄す隠者
を蕉むに伴と見て大根とよせたり 雪ハ小と偶の字脱之

「朝」乃春毛志ゐ隠家

と巳ゐ位を蕉れるとゐて漏るいかめしき上にかくても
付ゐ何ゐも多く合むに蕉しゝいたく蕉むつきれを
付ゐ更しゝいたく更しきれを付るゝて稲伴なれ

霓丸

秣原ふ人を葉乃夜埋ぶ 翁
青きいちこをつかす椎のて 翠札

途中此の挨拶之秣刈の伴ゐて乃終労を慰めむと
いちこおくるを手にあて「司」にする服を椎のてゐに氏
古要ずしたるに未来かゐぬ書ゐこのまゝに古不
まゐる菜深乃の衰を見せたりしか句途中のさま
あらい内にて口きしても途中の指を付るゝ勿論之

「迎」て笈の行さま寺 椽 氏ハ自己

奥

菜探手何ゐの花を艸 椎 翁
萩乃笋を掘らくる月 椽雪

コハ医師なる故ニかく召無あり何れの花にハ笋
を上ワて除ける姿とみてかく付たりもし
笋を上て見する夕月 にハ松之
笈
月代や様ニ手をおく背の病 蕉
秋分けたる 雪行灯 正秀
茅屋ニ月をまつ庭前の京をよせたり白くハ
月代のうつろひて雪行灯ニ風流を雪せり
風さへくる 掃の下 にハ自己之
神有月始明照ちニたひの人を注す
笠なる 涙や流てちるもみち 蕉
一秋志ゆまる 張笠乃栗 李由
日秋止ぬ科蕉の笠もと背ハ寝ニ庭を落て梅
下石上の飯ニ明す拾て張笠にちるもみちの文之
荒ちきせし 孔雀枯の屋
と我詞を作ハ布句の雑様を失ひ
参考 秋を見ん人のよりやに無学 蕉

志とみりしふする撫子の露 木言
其路地ニ人のよる京和を見出て秋露の体を付たり
あれし
といえて屋主の身柄と成て布句の余情となす揚ハ
己ヶ手柄を布句ニ与る和之平句ハ己ヶ力に位て布句
を云曲て棄とる和あれハ与奪の説天地ハ云之
田植とて目別ぬとふきの設せられたれハ
花故
旅衣平苗ニ包む食乞む ソラ
わたりの悦菖をしすれ 蕉
阪乞むと夜の悦より手を出せハいきと云て阪持ける
男の悦隣の葛蹄るを見てソレおすあといふ報之
号を設言の格トス 事なきおまるを設ていふ一体之
此編ハ屋主号弱ヶ丈きを蕉代てせられ号弱ハ
考えたり他より付ても句体同し 肩ニタと申す
笈
主ニ菓乃露もありや活大根 許六
冬さしてもる小宏の煤 蕉

すでに尾花畑の隣に活大根あるを見てよむを附者は
尾に隣ありやなしやと見る句と見立て窓閉られ
いふ隣は見えず前の尾花畑大根畑のとし見出る格を付
られ外その句を内にてよむ前と句者の意を［移転］
考へり○［評注］くる家は必ずしめて小てきさすの隣
居る山辺の古家と見えりはハ移転の法を考へぬなれ
此里そ山を叱面や冬古もり　支考
青うて動く燈る炭竈　凌水

拾

叱面の中より一句を見出たり今［執中］と号く初多端な
時に其中の一を執て乾くする手附句もあり
同ひしき燗見する――　はハ私之

三句

秋乃秋を法らん見む手枕　野夏
独熟柿乃落る木の下　二川
手枕を一樹下と定め独落るをきくと数に口も
独眠する格之系已る気の不自由を作て
同や寂しき竹の栗戸　はハ私之

諸樹ノ手尾

苦るとても頼む松あり木紫掻　木ス
宮に小麦乃山も眠らせ　堇二
、
仮令木の名をかはらずとも木の下陰の居は秋ありは句
と見て其物を山陰と定め山も降りすぎおれば床根も
出ちしといふ心を付けたるを前者に寂対して
同雪降りを見する門先　はハ私之

三月きく未尽と主の心死に国嘆之

紙衣こそあら／＼れたり春牡丹　本因
いびよい吟す秋乃海棠　巴雀
、
紙は石名を床に上紙衣に窓の風を防ぐ徘徊好の
作と見立月徘徊の海棠を並られき角の窓海棠のひ
きを惜れねたる人篠は［傍区］の一体之牡丹も海棠も孫子園
に眠るものひきあわむけれ下に手附句付く
同志露も草の戸乃さび
手とく客よ啼と云は其を秘情と見え称といふを

冬柄

滄柄乃たてくよいたくその中　詮元
雪孔志あ一の作にとふ為　丁牧

其称与古柄の作を同筆の極わりて[附句]したる草作
の付にて孤為にたてしきの字眼之

△主挨拶

幽

病系せむ西行あらん杖乃雪　雷枝
たせをと応ふ風孔破笠　翁

西行と称るい杖笠衣のお似る姿を明立沢あらでも
夕れに定ふ作とて風に乱るくたせをの事をこと
せく傍の破笠頃てたせをと応る門先の作を付たり笠
といはでい西行に似たる姿も新の志れぬ拾も学べす
先を[自答]と号るい西行と向ふ芭蕉と応ふ[は]を自向
自答する故之○[法云]お附句は拾い名お附のわと見る
按ずて見る故之先を翁の句にする時い風の破笠ト容
作を脱る句付も寸法破笠、学を良言ト並之
あい忽お附とあらむさる時も只当連出乃言法のミ

まて西行かと称し故い少しましソハ自己乃情のミ
写てお句の姿を立さる故之

花のさく分あらし葉乃翁分　猿延
秋に志あらし悔のくろをれ　翁

仕友せい為禄のむさく分あれと史を蒙す捨家棄
欲のふい為きるべと称する句あるを只翁子のむさう
て志あれる句と見て秋に志あらし悔は[ヒキ]もて葉に
叱ふ悔の姿を属たり○[評注]象分を人の情ある姿て
先いく脇へ入れ詞秋に志あらし悔の見る所もあきくろ
おとこ分にて社人と謙退の詞之は又の示にい都てお句
拾い人と向答するとく或い問に答或い人の詞に応あるを
人の詞を反してイヤく応にあらすといふ拾に作るへし」はり
以昔翁の姿先情後ト法を改めふ正風を志す尚情
先世戦の古風に執志せし人のことを習伝る感之

三

赤橋年奥さく枇杷の葉もが　秋風
笠にうちく山ふちり花　翁

楊の事にあ也別てびそのたゝ並ける体と見て潔よ
笑の水に流上て奥をあきれさせどと其この夜禁を
もみて奥後につゞる指を付うり高宇に夜禁に切し
姿あれども未奥の生てゐる風情を見せ楊に夜と[illegible]し
うり○[illegible]詠付てさやる意[illegible]白雪に人情あて対
柄のあぢ付けもぬなく是も古人の事失あるそ

後撰

[illegible]さき撰○に坂屋をきせ申　如行
古人かやうり　秋　秋　風　翁

純子乃秋風に温て一秋化ある夏見せむよりも坂屋を
うらせて古人も撰にやせし秋の風乃寂を志しめむと
口さと計ひたる指を付うり是を[illegible]と号るに理なき事
に情を起て死を傳に特する故に如行笑から
すに此此あるすしく祖翁なし此編あるまし

[illegible]を楊のあくしかな[illegible]私に

[illegible]

おちつきの家病せまし彼坂屋　風流
[illegible]し免てかをる風の裏　翁

我病いせまく其上坂屋も破て詮なれいつそ此枝て
よし風の煙物を弛走せむとふ人に[illegible]志うり○[illegible]
主君各自句の遠付[illegible]以其乃に此法あるまを
志ぬなく是本句を其侍に手技の坂屋のあつ[illegible]き
を涼とおめない翁に世を捨ある儒つき思る人にある
そ下旧契を傳て自換々他しうり

笈

葉種不寸莚のもしやタ涼　世襲
[illegible]あちさゐの郡　翁

本句を狭き門先と見立涼しく庭木見立莚端の所なる
所にちよろと腰休るに我心なくにある景の莚もしに
狭なれいこなくて注を懐て外面く指に起情しうり
実に涼風にて姿なるを[illegible]を[illegible]をきるもの
に幼術と称うり○[illegible]追打トシテ附会の語を入うり

一

撰るとの名称くなり秋の坂屋　小春
あくら月秋乃庇さしきる　翁

本句いつきおうやに出て撰入しむ坂屋もねるとの用之

にんかるを名称をむね柄を[換骨]してよき月歌
を見捨ゝ切て須す捨を付たり

奥　和らかに焚よとし孫手作麦　如舟
田種と俣に　捨乃　新記　蒔
麦版にヲ田種と見立焚よ此令言を老の新記に中
付る捨としてコハ立の句あれとも寂よりもかくいたるく
なりて[自他通言]もて捨ト作たりコハ句老の詞を掃老の
詞に奪ふ格之新ト称する事なれ若新して
[捨]の舎も　椎のもの　夜　此　俗之
淡の泪霧られたるに今に老る人なし

花故　蕨やうを又なるけりかつこ　笑鴉
市の子供乃忌たる　細布　ゾラ
なりけり此ヲ　なて蕨後の詞と見其師を市中と見て若句
の体を付たり細布は其云の老之此句今なる捨と見てハ
ワきの姿ありしきなに句老の詞を[雲]ましたり
雲丸　星今青跡に絶引て止たり　石室

急せ方もしき初刈乃稲　ゾラ
約して止る用を[換骨]して其稲糸せむと云る頃
せて改たるあるしふりを付たり
蒔を茅屋に拓て
そらぬ袒は心ハ時面に茅の家根　斜巌
火をうつ声に　冬乃　鳥　如行
ならぬ袒時面と云ひ用ずして家袒俗てこそりを
見る捨と見立新茶焚付る体をもたり　千ツ千ツ〳〵ト
うつ火乃火につかぬは面なると俗見て独ちつ　に
株に止たる笹鳴の火打の青を友ちうと見て千ツ千ツ〳〵
ト鳴たるは時面とも知れし詞の意と思ひるし茅の
きりしこを付たる[自著]の一体之
哉の十丈に茅尾を訪れて
宿乃秋哥よむ袒は荒にけり　支考
恒の木槿に新茶乃花　涼ト
荒たる茅尾の犬防の生恒に蕣のまとひたる捨之

白何清き庭乃秋雲路
と葉宿を奉ずに一秋の病に海ふれ拂之と口上有て
時見撰をゑられむ句柄を付るをと成るゝ人をも
いまた一他人の揺するもかわゆるまし

人さがの宿を訪れける

木乃本に四季木ね年　去来

夜一ね笑ふ名月のあれ　梨堂

夜実
木の本に蚕ふ用を月見をたまへり

お茂にとゞめて

蒔や波に遠る花と花　眉泉

巣に通ふ日ハ鮒呂二羽　茸三

三ね
池泊の萍とえ立水辺の我をもむと巻き二羽と
いふ[評]もて名を刻り

漂泊乃身を松むすぶ風　私之

茸三旅をとゞめて

乙鳥や去年の秋にも借家あり　丁牧

嵐色ある発句　友波
去年の初旬お広の嵐之とらえ　友に新もの来を
よせけり　嵐を上ハ一首の葉の[同]之

阿山てえて来る如月　私之

子規笑ひ秋素乃便り　麦士

見も知らぬ宿の橘　麿元

時鳥比之の人の尾張に来て其国の新素乃
便り[不勝]志てこの人の尋ねきて来て時鳥
鳴する夜とする君の橘は時分を待けり　其翁秋
素の宿之京へ閑き来ぬき未橘なる時鳥む橘
は未だ来む鳴く未橘に秋ぬ休め入し不勝未の
橘を作るゝ文中の見てる作をもて[　]居けり

朝ゆうを作るる袖の風の香ハ　私之

△餞別送別

檜笠雪を友乃やどりかな　相楽

菜一株を手まで色かく　翁

辛き雪中に笠一人の舎を煮とする力拂の飲れなれ
ハ一束のワらに足包て辛苦を清く姿を合うり
○評註 雪を煮とする風狂人に奉稱に足包む吳拂の
ひきを付くり此ハ非ンワらに足包む此ハ爪を此雪
中の具にて季寄にも出ケり誰ら雪をてひワらにて
足を出ける者あらむ元より評註の惑やのこなる
を一ゝ詮せむもうるさけれハ已下ハ閣ぬ

句鈔

時ハ秋よりのをあり拂のつと　雲沾
丁を友操に風雲の月　芳和

時ハ秋の哀なる如ハ大松路の床きに吉のをかゝる拂
なれハ暮れき詠のせとあらむと望なる西の山を望て
る姿と足立度なる丁を合うり丁を友ねトハ寸涯拂
より拂に拂ふ風雲の勇を暮むんくや此江戸より
大松を左ふする句ハ目前の姿を立すて空洽にあらん

江戸ノ横ハ通ふむ哉志くれ　独子
蘿陰の雪ハ　所る　月　芳和

仮令拂ろとも如く時雨する夜毎に伝訓し尾の枝木の
横に心通ふむと仍先を弟る句之此句江戸に心通ふ
ハ姿を立てハ空洽とある故に横の横を[illegible]してさつて
峠上る人の村ハれの夜ニハ後向て空眺るを見て徳ハ
古人の江戸に心通ふむハ拂の[illegible]之拂ハ本句の情詞に
姿を立るおとハ仍よりし

時雨くに證借並む葉乃尾　峯白
大橋の柴に佗をつぐ人　芳和

雨の尾をうハ時雨の夜ニ仍てさびを来きむと
いふ句なるを葉尾ハ姿を立炭もなき大橋なれハ
柴を焚て先人の佗を殘むといふ人をやうり本句
素来なれハ絹も素来の用なるを佗をつく人ト生仍に
作て現在の俳とし又柴ハ故に枯木立の尾に
時雨の寂寞し若も炭とせハ時雨の姿を失ひむ

白ク[illegible]に陰をめせ雪おの達　松江
一羽わかるし　鄭一むれ　芳和

めせとさしたる方なる恰の埔孔家おを付たり 霜
秋のうきは衝の声を[匿]て浦の霞を殿たり
よ紀禮は横りなれよこの雪 木因

迯
冬乃速とて風も後から云ふ 翁
冬の速とて風も後からふくからよき程につかり
かれよといふ人にて[斎]の逆付く

笈
秋乃くれ也く先この山店家の木
萩り様やうら萩はねやうら 翁
乃先に見返て萩ある笈家にや萩ある草家にや
ねむとそうる拾にて同伴の逆付く

栗
忘るなよ如は操なく山の雪 会兄
杉の茂をとり三ヶ月 翁
梵下を送て忘るなよと山上をさす伴と見て其山
の杉乃の三ヶ月を殿る拾をいへり是忘るなよ人の
姿に紅戸様の掬に似て付方遠くりコハ白子の掬と
同伴にさるに古来武器の掬を見るて然おの掬にい

公用に引也く都の名残なりと其体見えぬるをいひても
殿るトたたいたくよきるすとんに来てより世俗のお
のちく双方より呼りあふるすまもあらに

小文
秋麦もつさとすめぬ是途に 山店
又あひ牧屋の空 [illegible] 翁
つさと進ぬ皆者に一釜の麦喰おし人におるく拾と見て
さうなから又あふるすの垂に痛れいふ改て米集せむ
といふんを其師のお牧屋にて以る[匿]にかくる飲食の
掬いや氏容伴にて付さる時い句不考ると

サル
梅若菜まりこの病のころくけ 翁
笠秋しき 春秋 曙 乙秋
只まりこの伴と見て接人の往りに新しきを付たり
笠秋しいハ初春の頃にて梅若菜の移し古事の心深に
翻弄して古語の我を翻さりかく乃先を量て情の句
も実象にある拾に掬するるす宮に法に
[鳥]を笠にし

を比所なり勝ぬを更る時は此君は新て新しき
心に作るを礼と心得違る人ありかくて揚はなく
此一句は夜秋冬の字を入之なれ何の句にも君は
合て千葉不朽の意となるむ寝を心身柄の戒を忘へ

ツメ

弓備て乙鳥追也く おゝ小 小枝
花型こゝろ山乃曲月 ソラ
後を殿す也く然さを花薬に比るを惜て言に
て追ふる拾を述られ花型乱るとあるの海を
立出見と作て然に前の後海を見付て追力は
ゝる拾を付たり

拾

尾張にて前に前にて
時鳥さくを西へうひしへう 如行
落こまらしさゝられの着 ゆ端
只時鳥のとふ空の月きと 尾 あとお飛る拾を付たり
入拾を定めぬ雲の笠 ハ 月插之

ムツ

前力に成て也ともや河原山 枕笑
布子袷乃あとは帷子 枕見

強力の荷物拾る拾を付たり若分袖の通辞もて
「妾」一物なる麻乃さ衣 ハ 松之

白扇

乃先も揉安き方そ萩と月 依化
袷きるへくむしもなくこ。 支考
月秋の乃先の萩ある中に浅れさせとむしのなく
を守て寝もねよけなる不分とおちゝる拾之前の
乃先この笠尾と凡お似てコハ吹付之
「打」狐乃時を得る出来秋 ハ 松之

八夕
十角

舞立や扇に栖杉菓乃花 文采
面をきれも岑に月々 其三
殘金童こそひとく菓 廉次
あふいおのかあしの萩 二
三月間持せて菓の門出多 和什
くり仄巾に木兎の杖 二
見送れも其笠寒し月に菓 山只
橋乃柳もちり志まふ時 二

をきき笠見送る場の木乃透て目隣おき伴之

三和　先陣ハ杖乃さゝ所し背川　倚彦
　　長も若やく百合の花　笠　二
川辺の草花もて先陣に老武者の勇をしたるハ数
ハ百合の志ゝて実盛を挿ゝる草伴の曲之

風葉乃香を吹分る新編ゟ子　渭竹
　　笠を木かけに涼む桜根　二
お匂い分袖の人なるを只よし寸素屋の詞草と見て
傍の木陰に桜根笠脱たる旅人の休む伴を付ケ

夜　貝花乃咲てや鳥夜三百里　二
　　宣ハ虚乃関ちもなし　里和
鳥夜のさく比三百りの旅にひく鳥夜杖にも詞の
花さらむと祝ふい戸さゝぬ以代を喜ふ拾と見花を
伝見る姿を立打ちて天之を付三百りを[秋中]ハ

東摺　よん文を待そと厂のお子　弓和
丁巳五月　底にもあらで明る去の枳　巴静

夜　川とも静かし夜の清見浮　李仙
六月　白尾の鷹を見出す引明　静

柳　也く笠を考ふ柳の風情子　花リン
十三月　我あてかに鳥乃夜坊　静
かゝる和好あり凡稲の鷲古ハ同新同伴の句数多
逆て一字一点に付分て学ぶに考くものなし

△笛別

拾　杜丹志を深く送る幡のおぶ　菊
　　朝月涼し霧の玉詳　相紫
跡傍乃杜丹と見て玉詳をよせ霧にむの趣味を
[保色]しゝり笛おの口きにおの情を作るに勿柄之

洛の去来を見て其りのおを惜
也りかへす風のたゝるく鳥乱　十丈
おひきたる傍ちたの月　去来

附　雑話喧かりんむさいがせりと附する人を鳥を吹な
ひゝし也く風に准し晦之の句なるを舟も也り返す

もうりにて風の落を拔て仲の才く次郎四く体と見て
碑をよせ打ち書に荒波を見せたり京のおに荒碑
の掲付るをもて句に座次する理を志れり

三和

菓月や其名所とある日迄　其二
巻よりも今頃の新そも　比誰

九月廿一比と帰留せし此人なれと情の句なる所に
姿を立其名所とある日迄月数を欺くそれのおよ
りも刈干たる頃のそれを待し此人の[倉庫]掲を付たり
もし帰留の人を思ひて書い税荒とならむ

病後蕉せの人を
おくさき必要の日和や陽巻　二
小さきのたひ乃望な光明　九畔

志やもに陽るに光明と対して小春日和をいふ曲直く
高きさふたに十月乃こひ
と病後を労る凡情に逐ちく光明放るゝむ

舜

二尺といふ又あふ杖乃　おかれ　風草

笠きるかけの月に笠ぬく。　柳玉

二尺此二月の彩と容の[ヒキ]をよせ笠におの姿を立たり
もし再会を発る姫女の情を発し

「人まろむしの宿か　左ハそ　此ハ私之

△首途

旅人と我名呼まむ初しかれ　蒋
又山茶花を宿しにして　由之

誰やこもる笠の山茶花此冬日のつきを含て陽るに
風程の姿をいふ[俳殿]の一件まて逆付之

我名よもれむの句を使て
たひ人と我見もやさむ笠の雪　加行
盃を　しうくひ　〳〵　蒋

相禁事

我見もやさむ謡之此[柏子]もて笠の雪を注き大盃と
奪胎し　陽宴の姉乃鼓に付かしたり

栽

菓乃香に山路い焼し宿上　茶花
酌とり歩す松乃　新月　風乙

こゝに登る重九の宴と見て松に山路の姿を立てり

哥

聖い花に千りのこゝ乃そ途ゝ方　風草
ことのも月乃　残る　西明　南江

千りの花も一歩より始るといふ和戸出の作之

[illegible]

△待交

ウヤムヤ

堪せよ稲布寸　庭乃　友雀　自准
秋をしめくる　塩のさし　杉　翁

翁の内を止さる句あるを只堪求る者と[illegible]恒の
杉に雀の場をすり上さり久子ハ久二と通ひ杉の根
をいふ内そ本国に恒を見イ最古云之

衡

いく落葉支柱袖も縦寸　荷兮
ふひね乃裏を見する眠　翁

度々落ての時面も整はれと支柱袖も裾も縦寸
只縦さるは足のこと突いて見する根の[自他通]之

射

風雅にも痩てかへりぬ蔵の杖　小枝

枝乃裏をふるふ菓乃まい　十丈

菓の山路の裏にやせたる風雅の寂を付さる[自他通]之

、

土産まろ子供や異を杖の風　河菱
皮こ明れハ反故の裏ゆれ　丈

何を見てせく云と此物を採るに河菱に袖日記見
せむと皮こ屏くを見ハ土産出すと思て手を重しをと
見て作句と見立てかく付さり裏表ハ杖風堂立之
此情句ハ皆ケ根に考て縁に菓物を塗を立つ之

二　おもあし　月　のされ　笠ハ　[illegible]

乃九法一要衣を一盃に入て

去麻

先とまれ生名ハ雪乃一よぢり　正徳
手作乃　名にさらハ水　仙　魯九

泊みかくさらハ一瓶を生て手内条せむと水仙切なるの
雪の目乃姿を立てり水仙切に出ずてハ声をの隠村
見えまし

待交の不掃除も雪に通て

冬柿

掃よせよ捨てや雪乃山一ツ　貞加

手水柿ゆゑに来て大樓ゆ　鹿之
掃まゝに狹き柿を見出し鶴に高きき仲を殺しり

△雜部

熱田の社以大に破築地に例て呈敬にかゝる彼所に
彌を張て小社の詞を申し外に石を居て其神と
名のる蓮葉人のまゝに生ずるそ中に仏止ける

三

志のふさ枯て解ふ舎ゆゑ　翁
志すびふしゝる根深大根　桐葉

往来を止る楽店の狗葉迄も枯る根に[イ秀]して
其店頭の根深大根も宮行鳥に志すひしる寂を
見ゝしり志社以の御出を見ゝ舎字書くなむ

我ゆゑ井西ねの山詠葉を和して

京を見ゝまゝ中空や雪乃雲　翁
手ゆゑ志すゝ此海秋月　業三

京中空の月をなりて見捨ゝき此海の京に此ふ
月柿の姿となりて志をおのゝと御出に惑て

手ゆゑ乃詞の残る白砂　法ハ私之
来ゆ可伸に栗のかけに庵を結り

ダテ

風家や目立ぬむを彩乃栗　翁
柿に嵐のとまる法也　艸　栗砂

ち葉の義に風家の姿を立稀字に目立ぬゆゑ[ヒキ]を
付しり寂に後世三昧の事を思ふ勿柄之

葉根を喫して残る丈夫に談話す

幽

云のゝふ乃大根辛き此ゆれ　翁
一通也く木かしの青　玄席

大根畑の辺にて大根の辛き此する句と見立理面ふく
風を付しり例の答られしゆゑと引寄るゆゑし

二おゝ二得を携来るに

笈

葉の戸や日暮てくれし栗の酒　翁
隠手にのする所桶乃月　二秋

葉の戸　法ヲ根先にて酒くむと見そこの上水桶に
投込しる菓を入て跳子にさし居なり桶の

月かけを見る茅屋の伴を付けり

白雪の二ツ三ツに桃先桃後の名をよて

秦　其句桃より白し　乃仙花　翁

古歌　ワらやの蕪ふ屋雪　白雪

只桃水仙の白と[図]其姉を見出て白に屋雪と

ひゝかせたり号を黄し由をいはて宣談とあるむ

茅屋に桃柳あり門人にキ角嵐雪を持り

秦　西鶴子に桃と柳や茅乃俳　翁

翁に別し　陸奥　社　児　嵐雪

庭前の桃柳を眺て左右に花の二男子を並て茅俳

祝高なるを[イ物]して行手に桃柳を持行手に俳を

掘て高く指上る猿子に児ともの登てとらむとする

を粗さし上て載る老の親愛の指を付けり　翁より良

愚に我俳力のなと思て遊ぶに笑茅あるむを

古物監の古実を諸て

翁　月やその神呆社日乃下面　翁

掻人なきにて　わかゝの冬　佔木

神木揺「[illegible]」旅人お宿乗せり　[illegible]の一世首之

城主の日光代代乗に小性する屋田氏に中す

篠の露　襦に是し　蔵かな　翁

上ナ　杜丹乃花を和むひろ庭　千川

襦の高さ子踏る指と見て去の恒の辺より花庭和見の

伴を付ける[自仙通]之小性の心を見ちく自己あるむ

なる氏にて太夫の家名を称す

俳　ひらくと伺ふる扇や雲乃峯　翁

青紫なかち清く　夕立のあと　安世

扇のうく雲家のひらく上るハ夕立後再ふ雲の指と

[図]滴る山の伴をよせて青白の色を立かちつく詞に扇

の帰しを能くり寝に翁愚音曲を見ふハ前世の迷之

楚の女の操を祈して

白菓乃月に立て見るちりもなし　翁

乗麿　そこちに我を流す和月　その

ちりあし 白ヲ清き花庭と 囲 掃除の体を付くりもみちゝ
和白の宿を上て同室の柱おしもし 蓑し詞と交て謹
へきものあらハ夫母の祀いかゝる詞をう作るべき

荷兮 ニ字にて翁にまゝえ

金葉

風乃さむけ 雪よい 茶も 山 落梢
よき家つくく雪乃 足変 翁

雪よ白ハいく日も止る 振あれも 眺徳なき 家をよも
掃も山のよき家 続く雪足ホにて 雪よ白ハ 山に付くり
庭法にての白あれとも 掃ハ 岐阜の 現家を居くり

[illegible] 木横くる 扁にまつ 去白ハ 私之

我王ハ誘もむと 洛の旅宏を居て

青へして足せもやこゝ田植哉 己百

笠

笠改めむ 不破のさゝらゝれ 翁

こゝ田哉 白ヲ 簑ト 少とり 茶が母も 粉しきこの 笠に
出立もいさ足ゝ人も 笠改めむ白ハ 山をよも 変戦る日
も衣を改む白ハ 古語を含て 美徳に 不破と 対してさゝ

これに 笠の一句を 立てる 表 裏 之

終日風雅の言情を尽す

曽乃 爪もうけす 柿茶 信化

白扇

去れ日 ゝきき 苔の色 和 万子

其庭の乃きこ 爪もをす 白ヲ 色きこ 乾粒 あ 去きと
コ人くり

自他物我の 飲念

世を足るに 柘榴乃中の 隠家 鳳川

庭記

六尊に 教て 月も日 そさす 立枝

只庭に 柘榴ある 茶庭の門 敬て 世上を足る 指と 囲 て
かく付くり 柘榴の和に 名をてしくる 不揚の 魂之

一日又の 病快を 奏ふ

花揺

秋と 以風 勇に 志む 茶ゝ 牛角

渫てよく すむ 内井戸の 月 定良

勇に 入風の 快き 姿を 立 渡井の 水 汲上る 体を 付くり

萩秀

空や秋 枝庭を 揺れ 七多 荘揺 角

月に かくやく 五色乃 雲 東吹

陳務正会をすくむる此之成仏の根は揚を入て忍やるく

看病の人に対して

祇の菓は頃ろり初しれ　浪化

杜益

鳧乃来さうな水の流るゝ　従者

祇ハ多人の心なるを只吞川の菓と[illegible]とり

落柿舎に会す

菓に数よまれても村子鳥　先放

浪鳥

海毛少也る　風乃　去来

都の風士に旅する挨拶なるを菓なく様列松を

衝よる拾と[illegible]浪おふ風の月秋を付とり

あとせむとて

をし鳥の形もさしと云つて　竹枝

ブリ

筏はこのく寒き　揉　次女　凍

只をしの浪ひの浮る拾と[illegible]其川の菓をも

とり人揉る辺い鳥をつくし　嘉のんをいふ　松

廿日市之御生産之をきらひ

六行

見すかされぬ松の暖や冬木立　東雄

雪掃落す　鶴乃戸代　夕素梅

市白い佛殿の掌さらぬ心なるを只おもしろる松と[illegible]

雪に一入見すりしてき体を付ぬことに雪もれ乃

和漢をよせて庭上の松と定とり

時に宮遊に捉てひふい漢魚の風友と語る

連沙や鳧もたひねの松々　ヤハ

一株竹のもぬる　鶴　東和　仙呂

只浮鳧の句と[illegible]浪おふ深乃蔵竹の反上る青

鳧の鶴て而かふる拾を付とり

天満宮月次初会哭

梅樹松も浪おそ　秋秋月　葉二

和漢に橋をかくる　丁々　香及

小枝を石鉢に行ひて

玉乃水徳にて古湯の香之ひり　ヲ刈　香桂

菓の花さく　里乃川上　小枝

三和

△薙髪

紀記 自説 むつかしと刺て退れい又きし　高川
おかでい蓋ぬ葉のそ乃雲　独ト
情句之何を見てかく言むと隠る姿を目付見るは
葉あれい雲蓋髪あれい白むと葉の雲を観て此
句之と見てかく付る 俳 ひきくたとへい「刈」をいきく
かくまいおくや葉乃雲は句に仕立寄うとし
刺こり赤土塵六殿九月号　深之
三和 襟忌ぬ勇も色々ぬ松　角呂
情句之何を見て九月号と云むと作志の拂を探
見るに名刺の木葉ちり果し姿と人目に見られも
襟きぬ今も色々ぬ松乃元気なるに就て世を捨て
笑いあきわと思ひとも松なるさむけ心合する根と見て
志の木をもて其木を成る 自他通 俳 の葉体ひきこ
青新 自説 花とれて夏をん乃青ふくへ　五之
ひるねを洗さす　夕立　温古

人の青新にす夕貞相の下涼の快き根と見えり
他ワキ 北内 面白し　黒きを後の衣更　巴青
桐仕まくえ山本としきた　八玉
白き世界の桐衣を絞て出世界の山林に捨ふ心也
水無月や不二の天窓も消る比　末茂
一夏乃松ヶ　嫁の桐　友　隆五
不二に三保の松を好して表紙を筆尾にする曲を見
あちさわや其十徳の深仕足　二去
風雅もりんく旋も筆目　去松
十徳を茶会と見る地の筆目にむの涼をんもうり
自ワキ 十内 十徳ヶ桐の麻も夏ふけぬ　竹秋
風の葉も川　東　ゝり　之
麻畑の廻きナ徳きてあり〳〵拾也
ひるなわいるゝ多老の笑咲　帆十
ひて涼しよ宿乃明捨　之
夕貞の宿の伴も己ヶ天窓の子と笑ふ一もなし

△新宅賀并年賀

よき家や雀喜ぶ七戸の粟　菊

蒜ヶ尺四る　捜きく州名や　知足

大廈成而蘋花和賀ハ古諸叔の句なるを只家の後乃

粟畑と[illegible]そこに蒜畑もあり枯葉も咲る体を添くり

落蘂のあちらをさくまし　梅花　浪化

白扇

恨ヶ　されて　泣ひたる　月　浪徒

蘂の外を奪ふる指なるなり　梅花も咲るに遠ず

久む恨に　されて　月も　照度れ　ハ心の[illegible]を付たり

是おやれ仙のある　花の　新　化

庭乃枯も　冬ながら　月　呂風

冬梅

蝶せる　家度　冬　杜丹　鹿元

明るき　宮ヶ　雪乃　掃毛　六枳

何れも　只の白　ひきに　同し　二色白花　祁も　倚ひ

○

すべて年賀の右句に

[illegible]を　[illegible]　[illegible]　攫

長根葉とも　めたる　生先

老少ぬ　家　くむ　きく乃　酒

恵を　枝ヶ　お寸　年乃　坂

如此　付るに　右句　見ぬ　先より　梅　[illegible]　[illegible]　[illegible]

△文墨賀

月　雪に　埼花も　仏し　梅花　浪化

白扇

まてらく　去れ　けり　家の　去　林和

埼花ハ　庭前の　梅と　見て　我家と　付ヶ　余情　世上

正風に　隔しこゝ　心　如此　只の　白と　見て　姿を　立　花に　忘

俗意を　出ずるも　丁めさるも　句　柄に　よりてあらん

笠

二尺に　ハ　霞の　不二を　加ふ　壹平

丁の　戻乃　空に　士文字　莚支

二尺より　不二を　持たる　体と　見立　向より　[illegible]に　隔来る　丁を

付ヶ　七ツ　ハ　俳祇　元祖　芭蕉庵ハ　碑　謎文の[illegible]之

三世

打殘す　夜唐の　梅乃　[illegible]　画ふれ　平

夜を　[illegible]乃　松　平　[illegible]　有栞

後鹿梅ハ十法ニ云夏中ニ傳法の心を含ける祝なる
を只雲廟の梅や窓と見れ猶皆ハ去の件と定て
ハ雲梅の松を對し号ニ梅を称ス

花も扇をひらく去の日
居たすしき岩志めなれ
不易を仰く松の月々
深いかれす友をとりよる

此板与逢迎自祝祖徳後栄枝思ホの心もて
衛氏季を分て接遊獨する人あり弔古儀を引て
其武をとくに武ハ其人思ひて自今改めむ所に悔あり
と云り倦情もていたくさもあらむアヽ風雅に於て祖徳
を除とせすると知て狂募る人に傳に語ふてし

△初会

夷

去人遠くにしふい夷ハ恵なれ　菊
吹上ふるく去乃焉花　嵐雪

荒井鈞こり恵な夷の往来ふ大原の拾之

朝

日孔表をさすがに鶴の歩かな　キ角
柳に言き去年の相乃実　文リン

幽

手ゝ心や家中の礼ハ里月数　角
栄和梅をたらむ玉帋　介家

コハ

あらむ乃二尺の鳥始凶　孟達
たまら法孔ニて三月　去音

孤秀

菫菜に一色多し麦白田　乙由
歩に拾ふ鶯孔右箕　杜菱

祝の御り　翁初る涼
栄試る　宗の喫

と初会の心を作るハ待交の私稱之

△納会

小文

すゝ掃やくれ白く病の言鼾　翁
なくれて焉孔うる枯竹　山店

焉宋にて竹垣竹箒も掃結ひひきに隣にひくく趣

二尺

皆相め二尺の臣主を手のれ　翁
志の竹渕ふすゝたきの風　岱水

焦　児ら〳〵山や納の　庚申　其平下
　　短扇　発ヲ　陶黄小仙　紫和

コハ　也く手や児島の屋も九里余　想代
　　廿軒もうふきも冬ヲ　宮　和毎

深　手忘盃ヲ桃乃花ゟゝむ　洒堂
　　ひさに寄ふる琵巴の風　ソ堂

盃に桃出て手尾に季去を忍ふ　深棋出画乃
粗客の宴と見立　ひも深する指を付ふり

陳走を余江に捨ふ雪の日
手の深ゝよる　友子　鳥

あとく納会の人もてお句に拘す待交するに非之れお句
に其舎の意の詞聞て也ゝしきに稱に其詞をお会釈
するにも稱にあり舎の人に前出のことにて詞件と見
立ゝるゝ句に前出の人を稱に作るに軽口の凡情之といふ
を武人難旦句面に舎の趣聞ぬ故に稱に口をといふ之
志ゝせぬ時に前出略のわに何舎の意とも表れす」はり

いハ姿先情後は正風才一の法を志ゝぬ自己の邪見之

〈余奥　多伊男各

次句　花ゝりちゝに盃ゝりいもく露　扇水
　　意用の枝を立し犬葉　蒔

此句草木を玄珍ゝり寝に盃は低き指必草ゝむ
に疱と見ゝるゝきに犬らんあらむと定て疱の姿を奪脇
志ゝり江用の枝を立しハお句に余力の倍之

茅川　干魁ゝ花ゝさゝ冬の梅　信化
　　紙衣の衿に座おりの袖　小枝

文月　和の花や雪の公地乃雛嶽　リ和
　　田植乃たての心立ゝ夕栄　嵐枝

初茄　まゝうちの肌や雪乃夜舟　リタ
　　鳥にあるゝ杜孔冬枯　呉天

呉影　呉火をか茂にも許す園扇ゝれ　義上
　　指ゝゝ重る闇い青の雪　何声

余奥ハ儀式の意終て後時処もあり是底も労す奥程

ある時するゆゑ採鉄句合重賞なとするも又小老
をきくも余長之式の会ハ必余長ありといふ事ハ
あらず若常日余長老あらハ有句ハ其の頃ニ任給て
持合をくらす曲良自在ニさしくらす俳諧ニ持ふ一ツ又
後日あらハ一体の変化ニ肯をるゆゑ余長の人ハ之等
ニ無世さる一流の徒僕一カ仙の業且ハ必余長下略
とて三物を出し其本句千度も外しきニ限らり凡式の
老ハ平天ニ始て夕方ニ強れハ一度ハ外しきも可あらむ
時々本老調ひさより余長すくハも夕京の句とハ
余頗之又其夕京句の様ニ各労する情を述て

すゝしき風をいふ　椽先
手ゆゑ　おもて　見る　歪

或ハ翁等ニ孫郷ニ或ハ月みにくつゆくなとしり
いかに老衰労へりとて丈を句ニ述むハ其下の投云な
らすや弾ニ労ぬなに調る余長なれハ競気も来ニ
又とる定観ニてもすまれ席上の句様も無意なるや

△翁忌

白翁　玄出すもれふの仏乃　宝さかな　依化
元祿十一　さらふる之ニ　ゑれ孔あ仙　夕兆
一日ハ　塚乃　伽する志られ　化
月十五　畠並ニ　宝き　奈乃花　林和

戦

手ゑや　ハ云ゆる度ニ　初ニ　支考
花ハ五羽ニ　宝き　栄　恒　鳥泊

八号

声のこハ　枯ゆゑ　弾る　智　所徳
雲ニてりそふ　冬の　菓孔ハ　席丈

古伝説氏只此の句様ニ同し　依式時さる国ニて翁忌ニ
あひ侍るニ其場ニ花皆　仰く　枝葉　捨香　手向　北夜
木の詞もて称せむとす　帝白　君をき　追居ニて　句面ニ
其詞所ゑるハ様ニおあらふ事もあり翁忌ハ手ニ数万
不ニする事なれハ本句も余定規なるハ古く様ハ弾ニ
必体ニて有なむと何もて示せとも同様の悩ハ
そハ無れと云て読ず依之時面の此数多作設て曰

本句ニ一歩の差あれハ猶ニ千里の違ありむや各の
ゆおもて句ての姿を替分てよと云されハ衆人始て
句柄称の何ゟ通て都て替さる事を悟ぬ

△墨直　正徳享保の間ニ有へき俳事ゟス

東山
ちれいてそ梅を高うすみ出し　君仲
まう光をそふる舟の日　白枝

享保十五
一点乃松ハ動し墨の杢　九柳
人も花うつ清き山陰　思三

是亦義意ニ同し白枝始て望むれニ墨字ニ替して
光をそふと不易鍛りの意を請ささるを末代
其称をきめて鹿く旅俳く俳 素覧 余光 乃の案
あと替むハ其性之の揮ハあってち古人の心を移へと云そ
むあ句ニ墨杢とありハ只余意の外付ても其情ある
らむ常件ニ見てらく句あるハ猶ハ余情の託之又ある
も墨杢と偏固ニ作りても其趣あるハとれむ又ある
差ハ只花鳥風月の朗詠ニ面白くしむ法中比

花供養扇会始う程ゆしれハ何畧す

△追悼　懐旧

百日を追悼とし一周忌よりを懐旧と云ふ句乃
取様其趣ニ随ひて元哀傷の句猶ハ表ニ語て必
哀の詞を作らむとする時ハ都て哀情ニ歩せる事も
あらむそハ親者の事も引きてるハ卑劣なるへし
只先の句の格を咏ずる故毎ニ余情顕て為ニ志む
そくりニあまし依無先の句ニ花秋ニ秋の猶
対るよしさるを秋無光をえ途て五そうさるお隠し
無常之九仏のおたニかゝるわハ秋之哀光病死ニかゝるわ
ハ無常之其中白牌ハ無常戒ハ秋香爐ハ無常
といふ格ある事あれそ追句の傍ニ秋無常の下
をさす懐古歎辞發殘ハ無常秋あれハ五ニ於て
もうし又形容のおニハ下を入す

能者
出て
の花も母おきさ為そ汗しき　蕣
香清独うしも秋の蓑　キ角

木匂い一部内白衣をまとる拾を和花に比して夏字の答
をいくるを宮の様兄の姿に[illegible]して香の大清て題釈
の夏を釈する拾を述べり 拾一句の仕立無尽之

矢享丑の去故 悼此公の庭おにて

一 拾このつゆ名出すさくらかな 莉
すぢ乃日 早く葉ゆく 拾丸

花に拾て[illegible]名出す[illegible]机上に詩弄を拾する姿と見
て拾出張る[illegible]に入て永るも忘れる拾を付くり

[illegible]る 涙ゆ庭の[illegible]に[illegible]私之

印 あなむさんやな甲乃下の蓋 莉
力も枯し 柔乃秋草 享子

あなむさんやな秋者お前に[illegible]の多手入なれば[illegible]も
風にちめる枯木の力も落て[illegible]文句を拾て討死の意
を[illegible]の枯草に蓋の哀を[illegible]

[illegible] 門松にきけとや 蓮も無常院 莉二
殘秋と傍 うすしの果乃西ゆいる月 理葉

祭牧 さうひぢりぬちれまやむもなも利も 二
山おとくきす 谷ゆその花 ソ雪

さうひの花来ちる[illegible]更て山時雪のなく時山時雪
のむも[illegible]と[illegible]て一谷の草花を[illegible]

吊牧童 [illegible]乃 笠に出ろうや悟[illegible]方 二
柿の旭ゆ 極。采乃 [illegible] 東敬

哀文物 とその[illegible]や[illegible]に[illegible]る。[illegible] 二
衣[illegible]に[illegible]す。袖の[illegible] 爲因

悼十丈 花の[illegible]ふ[illegible]更よ麻衣 二
[illegible]の[illegible]も いろく木[illegible] 理角

[illegible]乃をき悼なれども句[illegible]とも字[illegible]無[illegible]の
歎を余情に見せ句面は只平生に仕立てゐり

悼[illegible] 七種やりふ一[illegible]に。仏の[illegible] 二
今衣の声に。花の雪ふる 勇呂

[illegible]今[illegible]に今衣の[illegible]を[illegible]正兄の天[illegible]
[illegible]を付[illegible]も准[illegible]れば[illegible]に[illegible]

歎信吾　夜ゝ名乃移るやむの白だゝに　其二
机ゝ声の千里　鶯　湖夕

告雨青　十三枚ハ忘ゞ東も其余波　二
木のたゝ雨の見西る長月　山リン

惜万子　其実三ツ其柿ハ画ニ移ゆり　二
枝ゝ固扇ゝ詩あり前あり　八宗

東山　翁十三同　オセをたも苔の下荷ゝ見る世ゝ　梅ゝ大
峰子の声ニ三子の弟子　二

柿も十三子の　水ゝ　千那
大桶のむも言き冬枯　角上

行乃一むらしく　枯尾む　蓑生
ちらりくと雪けする空　宮中

此頃の伽葉ハいろきゝ花　八十
雪も頃も　水るやとり木　一艸

三千　鳳三同　柿ゝに逐ねぬ頃の波ゝ　丈艸
一字の歌ゝ月も千金　二

柿ニ毎文の趣ゝ徳ニ千金を荷て一字の波ゝ郎

伊を仮て其頃一刻の古語を文とりてる曲言し
喚鶴の子鶴の歌や今の娑婆　百里
湖夕ニ今の移る月雪　二

笠　昆弟　鶯きや花も言ちも今り候　音平
山も眠を見す　青栗　二

八雪　同　鶯や古翁風雅のうしろ鶯　杉風
多ゝ木の美ゝ也月の雲　ヤハ

大津絵の鶯もおけ三十三とせ　兎陣　独
志きゝハ其をかさる松　承

白扇　翁五家　さゝ波や井波ニかたる蓑笠　支考
雅面の石もや　秋の風　信化

文星　基二陣　柿ゝの数移るや古今抄　丁牧
てゝ　移る鶯のをを　比誰

伊や天ゝ星地ニ柿花　笑吹
ゝ笠の枯ゝの涼雪風　拙奥

柿の名や一月着て掛。仏　花フ
峰子とらいふ鶯も此時　百ア

机　文書のおやや彼に留る丁　市席
月とむとを惜む去のよ　加涼
祝　下の方も今は御の後ニ　千載
拾ひ拾く　風の葉戸　席
家　其筆の語思ぐとや出筆　涼
ひろ世をきしの一部に書く　哉
あもひふ書く武張や百日　東忠
新たの光　私に清也く　東宮
ひふ上を急のあき夜花ぐ　一宮
せんぐんのまいに明あき月　鴻雨
竹秋　月に其俤疾し　かくこ山　和英
佐角牌　名のこ壺中に残る葉の夏　十知
泣顔の百日ころやおの月　冠那
咄は尽て　寒き手　旅
僧　鶯や日本は仮名に種の声　内的
其二七向　鶯を呼子の譜つきに乃り　賈郁
冬和紫　古人のかけり口角に夏秋名　ヤハ

陳子にしくるしさんむの面　苔路
みの　初むうめさでやはあのかく衣　笑閑
ヤハ牌　誰呼子鶯　刀　ぬり枝　梅従
五十日さくらはよそう年の花　、
ちよろくしと下に私の花子　風之
昔かくをしむ日ありやちる梅　梅笠
こゝあきく清和須む　咲　白川
凡葉に作る追善は新旬多れは釈き中のも武句面
頼く作るし句毎くに熱河ゑるは都て作物の根に
見るべし
△遺吐立句追善
遺吐を立て手長懐供書かとするも口キ句の掲に
同し是を本比より掲起は只今掲よりあを起て
始むは人の名あるを数て記学に子細を付て
掲起は遺吐を実位と見て丈に対て懐古手高の人を
付るあとしたりかくてもすすそ其人の掲口キ口句
調おかい百代あやぬ重宝あらむ是も古風の執是也

香椽　喜もやくりき調ふ月と柿　菊
十内　門のさくれし　乃の古草　除風
古池や埴花丁む形の青
宮のあかりは月の猿　秋　雲
時雨声横たふや形の上
くもりは深し麦の赤くに　雲
猿もともに吹るゝ秋分の
山の此方に　独秋月　風
捨の生るうひあれ手のくまに
払へとすゝは落るよの中　舎庭
八雲　鶯はわうと合する　鶯の　嵐雪
先公系　机の手燈に居久る　指　ヤハ
十内　雑なくや菽の捨子の苑浅　仙化
栗拾の笠に往来の笠　ハ
松島や霧は勇をかれ時雨　ソラ
月色猿とさらくれの裏　ハ
鶯やまた捨乃　二尺声　正秀

椹乃花に出す立　臼　西里
三日月や鶯かへる　猿　猪　イ猿
網の手なりは持山の花　西
○我をよぶ声や浮世の行時雨　ヤハ
みの　花薪なる法もの神奈地　素陽
ヤハ夜中の此に猿せし追善老之なるを素人の独
跡地を道あてて時雨のさひを解る体と図にて
六花　初雪や水仙のもの撰む猿　義
五高　掃に言さをあるふ楽美　素水
六内　市人にいて芭蕉む笠の雪
○都乃町を　祇夜大名　巴静
笠　哥云よりも軍出に出し声の山　其二
十高　ちるゝ名は打す花にそこちに　庭文
大友の乱美種の難大塔東の傍にと思ふに古哥の
哀よりも出るむ大花をちらし、我も今は花紅葉
のちる名にのこ秋乃と其山の記憶を付こそ

新。反引糸

今は押分見たる板ノ子　義
待せて逢きまち乃世後　山幸

安永二葉太波の巻之類は掲起孔仙ト書ケリ其比ありの名にやされとも谷川格のごとく邪ニ事なくてめでたし

△古人の句　是も常体之　多伊者

あら

月ヲ柄をさしたらはよき国ぶ　宗滋
投のたるまたり夜の秋の疵　我人

△文通　并留之

文通句の掲留之ハ挨拶句の掲ハも常体之さるを
此其文を異見る意を作ていかゝる事も付るゆ
まやれり是も掲ハ勿柄のおと品語たるより起るひとこと

義此比すゝ川は其寸と呼て中きす

奥

面まれて栗の花さく頭見ぶ　枕雪
何れの葉そ明蔵る　悼　笑瓶

只栗ある柿の面まれの形容を付たり

あら

麦を忘れ花におれぬ厂あらし　ソ里

手をうさしたる冬の帰雲　ヤ水

「此文人の事侍て属ありを云人宛き我友も此ニ」ト
改出しられとも只原ノ字を見返る体を付たるを見よ

△述懐　いろ花お出ありても虚体之

勾

ふまたり人も逢まれ祈しれ　義
理も仕付たる麦のあらし　許六

幽

ちちふともあって枕ある葉ありぶ　義
桂もさびしき旅子一本　如行

其使

此頃や四く人なしは枕のくれ　義
頭の畑孔木にうる　蒼　伯足

△名示

一

何示を方むさしの月みすし　寸木
あれ似たり三股の舟　義

山ト

きよひと名のうちりてよ意の山　万子
風の夜を厂は山ハ也　巴分

影

星時の周を見よとやあく閣　義
舟閣ある　あまの　埋火　安信

越　二上や　其名化粧の玉くしけ　桂白
妹うりゐくう川手鳥なく。　支考
宮嶋は同人の名所を結ぶるも又結ぶるもあり
笈　春風や　麦の中ゆく　水の音　木聲
牧田川　陽光　いさむ　花の糸口　蘇
越　卯の花乃初雪候ぬ　時鳥　考
卯花山　ひるさく　空に求る　長門　温古
宮嶋は名所の隠るゝ嶋は其名所を敬する事決て無し
因云三物表物数は嶋は何を付ても是只嶋限にておく
物所一色とするものは仮令嶋は神尺意無名
所の意を含むるも句面に敬する間なき時は嶋は
其間を付敬するまきもあて遠を寄先情後乃
敬之を比表物の嶋を見ることなるは含あるは付敬
てもよしと云る人あり　過則勿憚改
△類発句　嶋は賦意は掬るまあり
仲秋雨懐故人

桃白　名月や　笹ふく風のもれを待ち　蚀子
家は桃のうらぬむしの音　蘇
ぬるは桃だ多い起ねて面もれをまて　[illegible]付こ
桃十法　八重すさく　素良より桃は一重が　桃光
佛社伝　菜も小役り　うへぬ　鳥　蓬二
一名　金屋も　笹ぐ　旦れ　桃花　七面
　　和てはくけぬ　鳥乃　笹　二
一名　恒根も　勢うつすや　一　桃樹
　　人のひろねをおこす　鳥　二
書実法　雅袖は　悪やく　桃の老木も　桃川
　　笹り　まふ足乃　鳥のたて　二
寄情、　鴻夜も　公家の流乃　望桃ふ　有梁
　　声は　和ぬ　鳥の日分　二
佛社池　悪かこう　育て　桃の白さらが　川鳥
　　鳥も　其子は　母のやふ　入　二
　　周はうき　月は　見よりや　桃花　巫人
彼り、　我們すとて　鳥の鞍　二

云り法　花にさく法をひく柿の匂ふ　呂杯
　　素色のさひもさすう鶯　莫二
変化、　接分乃衣裳くゝや柿花　仲志
　　鶯の巣にし交るまその子　二
法式、　柿花さくやのしめに小サ刀　泊楓
　　忍ありしかしかう篠にし鶯　二

△四季

一　古池や蛙飛ひこむ水の青　翁
　　蓮の葉をはなる陰乃巣　キ角
根本　深しさの瀬伴るう水車　清風
　　青鷺草を見おす新月　翁
名　あれくゝて来いはあ也く独分ぐ　蓬姫
　　鶴乃跡をあくる橋の橋　翁
あらし物を橋村と定て字を[illegible]と見独分法心て後
孔をる鶴の足と見る風情を付す
新白　風乃一日吹てをりにけり　閑友
　　爲も交る里の麦蒔　乙由

此一和仕立の句は能其場其用を見出て深を立て之
四キの掛い七郎の法に委くする所に実に奉す
其出に□■□■此四下あらしの最乗強とせよ
凡宗曲眺望の句はよく其趣を見定て他にふれ
ぬ様に有らし又一段の句をすらしい手柄之[廿七葉]本句
に場あらし物を定場あらい時言を付よ此あらあるを
信て鶴に田沢爲に杜畑を付ても鶴と心得さる
を玉暴れ之又是此宗乱の句に
　　杖ゝイむ　妻乃　喋
　　見ちらし　行き月の門先
此宗色に向て只見る此心を付る人あり是も相対付の
古湿之今一ツ物を添て社二句の句に見る心はもらめ
焦心に只見る只きく此付方に鶴も付合るも
　　あきてなく

△雑

笈　かちあらい杖実坂を落ちた　一村
名　角のとうらぬ牛もあるもの　上芳

柴吹風　何となく柴ふく風も哀し　杉風

別　面のたれ男を牛持に出く。　翁

本句は送ぶの心さびき情あるを【換骨】して柴ある所の用

を見出し哀字を除めたりたらでは本句規定なりで平

句に堪む是雜搦の付方也○【諸式】雨の夕にも寄るさう

△搦の容易なりぬる事

【小枝考】搦は力一ちんな句の余情を云ひて付の手柄なくては

出まし手柄せむとする時は一定の中第一ありしき所之　文約

【平安花カ仙】

三吐　此書手格式松下ニアリ

鶯に朝日寄し竹格子　浪化

雛の居臭をうれむす　去来

雛又のあたりを払出す　去来

袷又ねおりをとり先へ　去来

いそうしるも先借ふ　去来

めつて吹するきさらぎの風

小いそうしさも持明る　去来

コレヨリ翁家

[illegible]

小いそうしさも持明る　去来

[illegible]

[illegible]

芸村曰其比去来いさうなき作者なれとる搦なと

せむいいと見やすらるべきを自の旅にをとりうきてや翁

のさくを見求る雜務の事にそ付れ翁もかくやかと

捨置されるも程人也うすや付はむ「祝者うすらく

去の静さと低並山まいはえなる　文約

▲祖翁事に搦は附句第一のおと示ふ事宜夜の詞と

去来是を京より江戸へ同なるをかて志るし　依此

六搦を考るに皆雜の法まつきへ言方まもうる事

程と思ひて今人何をせこうせにすべき

屋居に無用にまうりなる比人と

所走の海見むと舟さしなるに

蓮

海ゝ事して鶯の声なのうに白し　翁

串にくちらをあふる盃　相撲

本句は海に当られと鶯のなく下に目を止て行こゝ見る
に鶯のなく波毎に伝く相視の白さの反に見ゆるを
未当秋てゐるうゝ山を声反に白しと作る曲意
されは其透見る鶯の掛を定法岩波先ゑゝな
との作の風情なれて自家の姿を取す一きを古調なる
なれ出に相対し何にも通ふ事付きに未初入門にて翁の
改法を志ぬなく翁も亦是奥者といひ初対面
なれは時宜に許されたむ式新も其他計に此数あり
されとも撰集にいきつと積ふ事は同ぶ事は同年
同時撰の冬日にかくる勇柄撰一もなきを見よと
集は其時の云捨を安永四年に開又は蓮葉翁と
号陸遠は三力仙として作に梓せしめ翁の時は古調
の人も交れは弟によりて会釈もなれむ今蓮の
一回の世とかて者家の観矩を明に立へき時なれは

仮令翁の許なるまでも其道あれは郡枝すし
されは其時の二三子に矢享式を授与しふ法に是を
礼よとの遺教なりすや法君子なるべし

十七

明星や梅定如山かつく　キ角 蓮花

所は母子より強き梨の新　表来

此等の獨は子細もなく幸山の伴嚢の作きなと
趣向する所なるをいふなれは何も法く勇柄を付ける
そ晋子は矢享式を知り人なれは充分其教門下に
面へきにやはなるに翁の改法は弓をき上に得る
人もおく古調は久しく別除する上に相対は伝情
にて足るべき故に蓮の法子よく学ぶへ言不開
典君子所慚なれは常に継むへきは矢享式也

柿

隣くまぬ格人もなし柿の花　其二

まり隣の君ゝ千り　是ゝ　り和

本句は是金に柿を手折て隣を祝ふ体也実に掛せむ
まは此句を桃林下の隣店と移轉して立代入代る

撰人の称を付へるむを撰集の恩とハ云ハ其式ハ対して子
卫号も撰字の注あれハ勿論一字もなく句乃
姿あり後年卫和 撰才三の證ことして三和拾遺を
基とする其中ニハ証あり其号の註釋を辨す人ハ
かゝりて此号の假称を歴さる徒の多くりけむ其号を
一門を重後ハ了 アく所ゝもむ悉ハ一云末句も詠ニすべき
事あれ凡古の名家といとも句毎ニ金言ハ称あれハ
本出の称別ニ付るおを捨て万世の證とするなり
才子の作人只所をるむまくニ万ニ宮あるニ等
撰さるハ都て其所を摩むるニ似ともむ彼為子
の譜て称の枝を実しきに夫子ハ称不孝と所し
ゑくる所以をも心合すべきなりニ云むし
因云 新古も花見 雪月 秋 又原本の草仲 又一句の
立ぬ情句ハの撰ハ一手にあり実ニ云れハ附録
ニ出さむ伝今知るべきなりとも撰の付方まて活上る
れあれハ宮あるぬハ撰の称方まて活上る
古人凡撰一句の号ハ

一品ハも此ゝきを初ハ平句よりも安と信
遠ゝるなニ化ある事のこゝいり
ニ始 四季撰三百を一月より次ニ始春歌三百を
又一月より其次ニ草仲三百を三月より雜
情句百を三月ニ成称あさしむ都て千撰八千
月の称方古人伝今付句ハ一云下ニ徹所也人
も撰ニおハて此後行地を建さむ限ハ部仏
載祖の境界まて至らしむ

□才三の事

本云 才三の留ニ文字の定ゝる事ハ一句の撰本句のやうなれ
とも下の通ぬ不ニて本句ニあらず次ニ及すべき称之
此理を考る時ハ字て字ニも限すと思ハ此れ
とも此句ハ才三の称之ニ句の中ニおくとも撰等称
ニ才三の称を考ぬ時ハやはり定ゝる留撰る一
▲只ニ字て字ニ限ぬ理を知て自生を以ニ文表之
我ハ才三の作称を知れハ定ゝる留ニて所すと分

忍そ仮令て留まても才之体あらぬ句い必付ほ
きるゆゑ依を世かく作るゆゑ才之留すと句を殺する
人あり大なるひゑ之留字は句の殺ほおく字は多
そ作るゆゑ必留ぬ指はかきへて作るゆそうし
世は句字留は傳授ありとて或い初梅時鳥をと式を
押字抱字のさくあるゆゑ考ぬ人の推量之
▲コハ古式の評之体言にて留るを其比句字留ト
云習ふり古説は句揚仮名留行ハの時い才之句
字留ま寸は多あるをそい古式もよく考ぬ人の
推量之と評せられしゆゑにて其有を

連斉 蓋載独吟
月あらし 雲あの句ふとまの空
雲移ひ 更る去の厂ら青
長架なる 波を 松の 泊舟

詠 紅梅千句
さな姫のそらろやむの宮の門
雛を 雲とする 新乃 号
去の来 天下に名ある時号

昔の連詠たかれいまして我家の伝説にも
辞留体云留 何句続ても其滅いなく只其座の
趣に任て何留もせよとのゆゑさるに在比其昔の
字説を引出て句揚辞留の時い才之必体字留と
定又其字留せむるに上五字の殺にて字に字を
入軌倒してて留に留とあるんにせよ此り行後
いふ殺を体云ゑて殺る句の軌倒する謂いあるほ
隣もまた定ぬ帰来何日の時ら氣も此才之
ありしを一座を禁て他少を許さた右句と
平句との境に此才之の句字にても考る一し
されと最初の留にてゆゑ欠ましきゆゑ
▲才之に限すて留に留の句い茶後へ付保て付よき
おくされい最初の留と心得美なる留い其座の
趣によりて用つきゆゑにて
本云 幸さきの松に花より掛にて
此本句の座を考る時い本句と才之と平句との

是おを志るし本句は一句の中に曲言にふるまひ
此本句に花に曲にして松の樹とは言也
▲うゝさきの松の樹を詠せむとて皆の花をもて
一句を化粧する所最曲中の曲也
第二　辛崎の松は去の秋樹にて
是は第二の拾に此句花の一字を拔されは本句より
勅く松の樹に言ひて平句よりあきあれを志るし
▲月秋の松の去らきを樹と見たる所言也
平句　かりさきの松を去の秋見返て
是は只去のうきのみあれは曲もあく言もあく地の平句也
▲平句は平生体ある地の句は云ふて熱海の雅俗に
拘す只其侍ある作を以て優は仏の光明は其
の侍あれは平句に拘子の平下は事を拘子の作ト
作るは文に言に一作意あれは第二の位をもつ也
【画】第二の姿を志る時は以字五字にても第二は
留るに惜て句字留はいふまも乃ふまし　上下略

【考】第二は一作にて長くなりて生れも陸分よく
付所るにそいふ以て面に面ちむ面なと多くする
事は只殆の面ちさるやうにて おのつから四句目の付
出る様にせむ為に字面もあり面にても面字て四
句目を略出す意あらは何面にても結る一し　文約
▲今第二を言に作る法をきをはいふ事凡大切二通
△剛八通之かく名目を立るは得面かしめむ為之
○見立作　△人立　△天然自己　△自己天然　△夕千人
○不用作　△上五云　△上中五七　△中七云　△下五云
凡此字の法もて作る時は一言付て句に平句に異なる
之古きおよ何面は何辞をいふことにきふ又さこの辞なと
いふ事あるは古式を写傳する也之甚つまは言作ト
次へ及すト二条のおに教あり　やちむもあり　分り活字
何面にても打合あるは第二平句に限らす詞に
述るお皆志なり　多象には辞の係結をもて第二
とせす面の文字に拘す一作あるおを社第二とすあれ

芟中て面ニ面ニ正格及今の面ニ付ニ除て変格の
世ニ之家ニ又八名の事ニ名ニ称ニ付ニ名ニ称ニ事ニ
教作あるを多名ニ称ニ名ニ称ニ名ニ称ニ
述句を考て自知セよ

「八平句ニ作ニ事ニ下ニ

△五五

拾

拾ニの奥のんも多ニて 義

「ほニの中——

とふきニ拾の俳の悟境ニ対ニ奥ニ比ニ事ニ不ニ良ニ之

一 智ニ卑も我ニ口の里ニを己ニて 、

「——きニれい

巴ニと又ニきを名不のニく作ニ事ニ不作ニ之

扱 七夕の八日ニおのさひ〳〵て 、

「——ニ付て

発句ニ 教の子の水あさニ恒来て 許六

五七日 「——を漬ニる水の——おとすニ

十人ニ十人ニ漬字抜て題ニ去ニ名ニ世ニ月

代ニ味ニを考ニ同ニと名ニ作ニ社ニ中ニ名ニ

字作 下ニ拾の里ニ一家君ニく和ニ知て 、

五七日ニ事ニ之ニ句ニを付ニ書ニ名ニ拾ニ字ニを抜ニ名ニく代ニ事

三の皆ニ拾ニ字ニて里ニ字服ニ仁

「——の作ニ名ニ句ニ

亭 教入の子ニ大名の萩ニて 支考

「——も

大名の萩ニ名ニ仁ニ名ニ句ニ又て教ニ子ニ起ニ事ニ名ニく降ニ名

衣被ニ事ニ件ニ名ニ〳〵五氏の子ニ名ニ受ニ寸ニ代ニ名ニ

教ニ名ニの下ニ事ニ名ニと候ニ名ニ称ニ名ニ拾ニ名ニ仁ニ名ニ

、 教入の子ニ隣ニ名ニ萩ニ咲て 、

「——もちの来て

隣のだての折来ニ事ニ門ニ取て彼ニ不ニ泊ニ之ニ萩ニ

を仁ニ名ニりニとひニも ニ隣ニと手ニ名ニ付ニ地ニ名ニ口ニハ

作ニ名ニのニく作ニ一ニ度ニ付て ニれニりニ名ニ

西花 此秋を言ニ延ニ住ニ名ニ

「——斉ニまて

そニ名ニ月ニと秋を惜ニ名ニ名ニ困ニ名ニと ニ事ニ名ニ之ニ

西花　夕顔の小家も今ハ車にかゝて　古考
　　をちくに見後て
、　笠きこと笠きぬ人の連立て　、
　　引ひ人と　不の
、　やまぶきと雄姿の子供掃出て　、
　　追
越　伝説は是弁の戸口付くて　、
　　式にをなりて
市両　百姓をきらふ子供の鶴ねして　ヤハ
　　鶴まくにさする
小弓　我松奥に小米切なる人あくて　無住
　　法ひやす
白袖　山里はこんなやく思ひ寄給て　小枝
　　不まうしに
枕盗　跡迄ハ目鼻もつきお云て　牧童
　　あと先もなく
東山　行列もむかでの足の古宋にて　立枝
　　の引つくらく

、　為和家敷にあふなく舞多きて　風口
　　手軽く
七さゝ　陳をかむ時いゑ有りに乱を付て　之仲
　　斤へにふり向て
汐　高人の袴を忘るも陳の見えて　敗白
　　似乱なて
ツクモ　唐おりも今の紙衣と見彼て　六択
　　抜くて
東花　仮茨のこ笋に小袖のあれねて　万戸
　　のそき
、　代さそと息子の居衣忘おりて　不実
　　をとらむと
シ、　表の日社山は隔の一の路見えて　知角
　　うるさき
、　入月と出る日と山に舞多きて　山リン
　　向合て
かも　もさこやも歪きぬ猪に泊盗て　正住
　　会入て

三匹　町並の古も一新歯の抜て　乙由
　　明ておて
山ヲト　茸狩の後は行灯け彼て　為由
　　すゝきり入り切て
ヤワ　さわらゝあわらゝ橋の長宗まて　秋坊
　　足返す
舞　徒りを後の大徒にあらゝめて　左角
　　中にて
長良　菊入の弛迄に禅を立せて　り和
　　只手
枯　小笠原ちと見れば洟かゝて　三州
　　嫡ゝせて
、　村西の空を徒ゝときぬきて　内的
　　清らかに折られて
、　踊子のおくふ時も於にかて　亀町
　　並ねて
三お　国府真芳の京を笠に忌て　有栞
　　あらの京より出て来て

、　金の生るみかむの梢冬待て　夏及
　　黄ゝつく　　を
、　小荷駄より牒は重荷の意をて　兼弥
　　司るよりも　　せうふき
、　高木屋の山裏に白川仮ひて　宇屋
　　裏狙ひて
、　流らしも松に霞の上忌て　固秋
　　たなりて
渭　千金の去を松木の歩にかへて　立和
　　にさし入て
、　真ふやの門を衛に出代て　李里
　　内から青
小文　高時の過てさひしき牧の地に　翁
　　いは居とられしあらのしさひて
枯　行灯の外より志むむ海山に　文華
　　清るあとらゝよの明て
秋百　玲瓏て出されいるのられけに　支考
　　見まに

朱六　去年とてはをかへて暖に　漱暄
　　とんのうつりきれい——
足長　千金も持て一百の芝途に　巳陸
　　別るさのさひい——
あら　夜襟誰か寛恩にめてつくむ　二羽
ちな　「——月交ある名を付て
拾　也く翔いく度あるの情かくむ　ツ英
　　「——を恐る——
奏扶　掃よせて流る雪をや国ふくむ　路通
　　「ふく布る雪を行へ掃よせて
随　末葛に屋のよろんのむなくむ　千梅
　　「——おもの件なして
小弓　秋金と中を連ちく落なむ　東椎
　　「——のなき男ハ屋に——
冬　花藤弓骨の霜に咲久り　卜函
用言　「——肥——
白扇　船次の間に余室のさくもなし。　信化
　　「——を忘りり

其説　雲堂なく宣にはあれ庭もなし。　始隊
　　「——あくとおもれて
戦　古いあと笑きたる人もなし。　陸口
　　「の人い形かりをなりて
　　此松に云て月さる枝もなし。　竹堂
　　「——面白らしぬ——
三ア云　もなし留い本白に蛮いるに角もなしと云に
中すを本白のもなし。弟之い牛に角もなしと
称しるんなて弟之のもなし。
不伝　本白のもなしに雲に作る蛮い牛に角もなし云ふく
弟之のもなしに実に作る蛮いるに角もなし云ふし
▲蛮云 臣二 義の伝云とあれと古伝之三ア と不とにはしみ
もうらうへのみあり蛮のはさる俗固の説なき
事説句に雲実の中を入るを見に又もなしを
古来諱とんなれと此号のもなしに用言之
ひさ　此角古のワやくに伝し其の意　孫松
仲云　「——声高になく——

〈天姥を作らんとき自己まづ作意を対する例

捨　手の僉儀頻りに眺して　三湘
　　そろ　人ありて
分夫完人の目を門ふる采信も月花の眺を
稽さらむと自己の意をおせらるる不啓之
上十　門たんの採色にかまむ月を入て
　　ねむる去の形明て
共　鶯を三月塗に追出して　去美
　　の　それりて
三笑　村雲を月のきりむを見かくして　伯兎
　　光をさくられて
東花　新らく花称に照れて　斜花
　　明らく漾まる称の眺ゐて
東六　蕎麦を嗅に来て　之者
　　に　却して
反衣　ちる時に尾花に杖も誘れて　、
　　ちりてゆく　も　に

笠　鞋の後出ぬ徳りに門入セて　、
戒　鞋箱の二字を祝り出て
　　を門きの　に　似て
、　搭ちも成り杖をとめて　兵部
月　去の西く月いまさと園居て　冶天
　　室せきちの情むらむ
八夕　稲に赤きと月の空に宿て　宇中
　　三月の明る月なく
山ト　秋風を地中の水をあつめて　兵通
　　の　吹居て
フリ　あの山乃樹を見ると月出て　村女
　　あるに
夜雪　よん宿をさらせに屋に萩咲て　卯七
　　の内に
秋風　稲搭く案に稲仕を口ゐせて　杜菱
　　を　の旦来て

名匿　蒼ゝゝる日を夕月の待ゝ迄て　字案
「――ゝ――さ――出て
柿ゝ　雲あゝ我身と老嘴て　花つ
ひちりなく空ゝ――の――
僧　やふ入の迄ゝ言ゝ髪結て　履陽
「――を引行て
三和　乙鳥の巣を鳥ゝ巻ゝれて　杉丈
「――い――の寸ゝ都て
、ゝ　青蓮ありく日あゝ嫌ゝ　巴静
「――ゝゝる――悪ゝ
タソ　ひちりきの穴より杖い通ふくむ　牧童
ちむ　「――身ゝ入もりく杖丈て
思ゝ　麻の角雑の都ゝ花ぬくむ　鳶橋
「――なく時――
箱　和茂待ぬゝ月い出ゝりて　箱
ゝり　「――ゝちぬゝ月出て
冬　横松山家乃伴を本のむふる　重五
用云　「――ちるゝ山家の伴ゝえて

和辰　清ゝりむ　都ゝ見れい郭出し　牧童
「――見てゐる中ゝ――
△自己ゝ作る今を天拙まで作意を付ゝる例
菩松　菩のむい桑をのむ人を歴めて　箱
孤花いゝまきくと問ゝるゝ花和紫ゝ花ゝ酒をすそ
のむへれと言ゝれい己も皮皆を得ゝりと箱中されし
「――を――の――ゝて只ハ地く
壬　一書鶴の来てわる松ふりて　、
「手をふる松ゝ書の鶴のねて
後振　一と七の仕事ゝ麦ゝをさまりて　、
「――を――却上て
花故　日面ゝ笠を並ふる原ゝして　、
「――拭遥――ねて
奥　夕食ゝふ時ゝ和面ゝ月出て　、
夕月のうけゝ伏ひ、飯ゝひて
衡　松をぬく力ゝ君ゝ子の日して　我人
君ゝ代ゝ子日の拝松引て

サル　股引の打ちぬらし川越て　凡兆
「　をうしつもあくす　」
雲丸　黒髪の花也く鹿の宮明て　不正
鹿の宮明ると髪の花りて
タコ　羽箒の風やむ後に軸出て　楮風
「　に候を　払　」
ひさ　引捨しまい枇杷の行方にて　ヤ水
「　家本ひそのにへに引捨て
冬固　山本の鬢とまる雪うきて　安伝
「　を雪うきの月い止られて
ヒ十　砂川に志てす松釜のかたむきて　素山
「　を　けて
後弓　孫典の冷る机を押やりて　支考
「　れい机　」
古今　やふ入の弛走に門の萩咲て　、
「　ミセて
東西　渡舟楫に見ゆる人待て　、
「　ち　」

雑　今をうりて返さぬ雪もれて　溪石
「　うるとりもなく　」
東花　家根葉の高の板捨る雪もれて　蒼白
「　雪うもるとこの板て
、　まふ岡乃もてい欠によの更て　觚浪
「　によの更りい欠して
反衣　出迎のぬり持一荷袴長て　鄕古
「　持せ　」
渭　花に也く名言い髭の雪消て　之仲
「　白き髭刺て
三和　そだのこゝ住居の雪をあてまして　若椎
「　を　方に待ひて
、　早来の和者に持も軸出て　玄致
「　河を持　」
、　明うる見も曲恠い枝中にて　仙枝
「　明も志まし　にうれぬて
、　帳子の下に裕の杖い来て　嵐青
「　に裕ゆる　の　」

文里　曙は聖山の裏に暮られて　臺平
聖も山も去の曙――
コハ　ときの声ろと山風吹にけり　詩六
ケリ　――嵐ろ終――
コセム　踊る青さひしき杖の数あらむ　小枝
ちむ　掬さふる杖に踊の青少て
八雲　菅笠の中よりも枝や白むらむ　文抄
――物の空を見て
、　浦去り聖ちり杖の見仏ミ　ヤハ
ミ　――い小原の草を刈せけり
白見　荷の後り一人ゆく夜ふ夜ニ浮　外我
仲云　――も人も夜せて送る――
△古語裁入并文法を作る例
十七　ひらくと蹄に蝶の雪ふりて　翁
踏花ニ蹄香は詩を雪ふりてと奪始換賢し
ゝり　鞋に蝶をもて花を踏見しるゝ不ぬと
難　留貴にも浮へる雲の月を見て　素拙

不幾而富且貴於承如浮雲は自他しより
白扇　自利する徒に杖を憐る　支老
社お明徒社形新自お徒は掬写しより
西花　鶴も何もあらぬ哀をして、
古今　聖とあらば鶴とおりて逢へむかりにたや
も君に来さらむは反軽しより
焦　二教入も天の扇衣柿に忘て　周東
君が代に天のも衣柿に来て は斉を捨ひ
三教　天つ風雲も落忌の夜待て　蘇芳
天つ風雲の通路のひらきを借ひり
孫抄　誰やらか霞と空を旅立て　吾小
教をいかすことをもたに出しかと は斉を含ひり
雑　桃子とる花も和紫もあらぬ　一舩
浦の笠家の杖の夕くれは斉を採ひり
深　山雀の笠にぬふへき草もあり。　嵐ラン
号にぬふてふ梅のむ笠とよめるに山雀に笠に

めふ事もあしと設難しとる所作志く
西花　むらゝ山の笠きて居る名もなし　支考
笠きぬれを笠き寸と云を云に作て音を付
とり同音の掩字変然なれども作美く
本出　陣もまゝ空くぬ鳴き　蒋
詩聖七月の隠見く　悉率といふ事を陣ものも
字に隠て見えたり「絵むしもト笑く平句なるむ
柳　柳の木に志ふく扁を仮拡　涼ト
柳條に志ふく扁を比視鳥上人の弟を拡とり
東山　さそ風たるく忘ぬる旅衣　推之
うゝ衣きつゝ別ましたうさをとりたり
○
[illegible]　鳴うゝに雪も冷も松むしも　支考
見を諸弥特伝の法といひ詮する時は才之の上留く
又悉率の法ともいふべきや雪も冷も松むしもと云て
結語に古拙二字を取す其法は詩聖にあり爰に
いはむ文法も句格も強て新奇を好むにあ

らて其句其字の用云用なれは易て学べきは法
格の用にして学て思べきは句作の云用なれば文
▲文法句格にて作る句は皆才之作く已上の中にも其作
例多くれども文法といはゞ初心は難きなりと思ふ也
とお目を立す混し来てより才之なるでも其中
其句多きは手柄なれば弟て作の云用を省べきなるに
△上五云に不用の用語を入る例
不用の用は前句に強て入用なるとも一句の上に
最有用の云にて此詞ある時は一句高調に少四る作
をいふべき前句にも一句の上にも云用の語にはあらず
守陀　陽光に独明の牛乃抗ぬけて　蒋
許齊　悉率に陽光なる比は牛の勢強しにより
カシマ　月歳日　あまき玉に振れて　、
蒋　鶯の宿を来て戸を明て　、
ツハメ　月ましと角力に袴抜捨て　、
涼　衣うつ梵いてるの立てうりて　、

雑　たつ手の跡をそれは泊つけて　キ角
一　鶴鳥ハ先ゝう母衣を引ちりて　ト玉
東六　菓の香は十里流るゝ川越て　大川
小弓　京へ出く水苗代にせき止て　茶鷲
三和　松風の庭に夏を干立て　一空
渭　白雲の色よる夜に薄暮て　桂岐
三貞　雪ちきと夜明の笛吹列て　唐之
東花　丁の声江湖の傍乃ちりくに　彼青
西花　蓮ハ老乃個をこかすらむ　支考
あり　夕ゝすゝ深おぬてうつるらむ　冬文
十七　去年ゝらみ子いさるまうきおを　紹慧
六行　はえ麦のさてら求る人もうな　ヤハ
拾　萱草の日ゝ糸ちりを掃もせで　呆水
廿九　雲雀なく小田ハ去りの比あれや　孫花
八寸　鷹ゆく仲はたゝ帆の　葵十
三六秋　あれやハあれぞやうたを首し詞あれハチヤニヨツテ

何しかとゝ子ゝ又下にお合の詞を省しハ香ヤラと云
ふともある留に用ふるハ大方チヤラのふこ成り
越　三盃ハ聖中の松乃面白や　支考
あのやハ雅此やハ歌也此句又立自己天然不用の
三をかゝれハ何部へ入るもよし此教徒の事に多し
東本　汀水はいさよひの闇のつもなし　持サン
八寸　三月は神つけの獄の隙もなし　文十
、　獄月　杏に芽めの山もなし　晩翠
桃白　川杖を庭に寄る石の色　千川
雑　小に雪　枯梨の松乃加斤　彫葉
瓜　日本にも高悪縁の筆　雪和
つり　陳始ハつけて先祖の物語　巻耳
蒻　蓮附分　赤ハつしの花盛　りま
△上中五七云
桓　此君と名をいふ外の事務所て　蒻
夷俗　雪の外の徒を隔る松てして　雪沾

ひさ　たひ人の風かきせく　去れて　出翠
東川　世路のふ所にせく程　雪ふりて　支考
西巻　たらせて　墨に形鄭の乃も来て　、
白雪　紫の大徒ふらんに係生来て　、
ミ、　状ちんもいらぬ使宮の丁門て　華二
東花　かへ所のせ出し　絵ヶ月をえて　一体
山中　ミそあらい一石もうり　出来て　蓮水
ヤワ　晴をあしに乙鳥の往もてし　夕市
む橋　乙鳥の寸きろ日より　稲川て　幽也
三和　庭連ふる根に市日の年きて　蓮根
竹秋　月村の出ぬ月に月もいきよひて　庵俊
柳　両根の俗ともあらぬ廉門て　万り
、　出すしの鶴て　明やさてくらむ　南村
東巻　菁川ら連に　我意をうろうむ　及来
翁　一度にいねもせで　陸の眠りり　乙秋
東山　一度にひろろと雪に　世く月　木因

此号凡下ねりしてあへ付くり上中に不用の用語を入るに序者に号しあり川の山鳥の尾孔出中に長き根を独ねひらる根の見出るらしし必あくん得逆てたらぬ詞を捨る根ある作をなすなかるを

△中七云

雪丸　さらし形踊に急く布橋て　翁
你　雪の月よくねるあに若しして　、
芳　恒生　形かしんなき角ふりて　去来
雪巻　さひ人も一歩ら沙に草臥て　支考
小文　祖産愛山を後に去られて　山店
哥　かる時も極る時より田にぬれて　乙由
倡　一家に夜を解に布おりて　急川
三和　よの中に初臼のうこの長栄にて　二川
友　君ひらよい草かちの臼に打ちきて　去芝
梅山　為絨絵去のおとて白ぬりて　り由
白兄　糸さらく粗广に雪を定そよくらむ　山陰

八番 篝毎に吸するちから哉。 行る

是非 鼻ぐ時も旅の跡と麻衣 何声

△下五云

一 清水出る溝の小草に杖立て 翁

御 初月の名残も染にたくらひて 常白

白鳥 古刀にお代の笠を鹿末にて 支考

西巻 天窓そるまゝに庭石の元とて 、

三お 情かの名は拾て茜見て 左把

、 ころ〳〵と翻する声に月を見て 九很

赤花 小倩と跡さの上に森斜て 高川

秋 井戸掘りての手すれは笠挽て 風律

萱 献立も係夷来は月きこて 岩ン

充氘 田に口る楽か声の。あらうらに 相楽

討 人足の天窓箕に。去風に 去来

充乱 尻出の日まくかさる。釘落に 、

八番 目代の居並地ござき。着月に 吹寿

サル 秋雨に出来しまる。月名に や水

サヒ栞 に留は附下 月名に叢蓋あり秋雨は人に係句を作る之

△是意非之に留には斜係も意願もあり此五八皆意願

なるぞ又下中上と反る事は前後も赤文なにも

きこえて来なきる事へ九係句は上五中七の後ろ

後此云を入るわ之係云は「秋雨出来しより月名には氏

氏八月名に秋雨出来しよりト反り「出来よりる秋

ふ～き薪月名には氏八月名に斜しき蕭出来に

名り下反るとは五係にある のるき木の至く体云

に続く辞あるもの決て係するをなし

言白 鬼て母衣表志一勝露らむ 昆天

之お 猫帽子に被に笠に百子哉 君仲

十七 雛絵まつ陵乃七言来 新水

□裁留本句の第三にて留不苦

裁留の本句に第三て留せぬ事と人々知侍れ

と新古は是なきり流俗 此治定の事とし

●まて留ぶ留

まて年通ふ所にあくたひらぶあとくいふ見立有句に
称ふんのぶ多し此分てまて留あるべし
▲只秘出要訣の意也 昔より哉に之この名目を
分れども哉は皆歎辞にて用云より続くト体
云より続くト二条之変に云治定は毛 終は毛 皆体
つきのぶまて見おいあし 又にてい上の事を下へ
云送る辞あれい哉とは活指電流にて文に云の
通ふ所あし 要訣い翁のさらあらぬ事を挙る
彼治定ト云ふるるぶの法句にて明之

みの

木の下いけも 殺そさくらぶ 翁
明く来る人い 悔なる 春 風麦
悔悔を重する 程の情にて 宮木

翁

貞夏の枯理を見る月日ぶ 沾木
人おとしに 時旬 雪ワく いま
夜の月い人の 私ある 高七にて 沾桂
月も 暁日もさく 菓の山路ぶ 司馬

三千

扇にくめて 酒も 志ら 芸二
才六に 宮の市も 手ふりて 友徳

□三わ

合云 文集曰 家旦の祝詞に古より三わといふ事あり
三才和合するんし
▲三わの説古来より多き中に此説いと種にて
八四半 [illegible]句の口三句引出る 新にて家旦三
わの手柄あしたとくい小なのきひしく見るうとし
只三句に百句千句の活をしもるべし 文約
▲又立趣向句作ホ除く力を入よといふ事也 世に
云古しくわを見合てい只三句にて 物をとる 論
あし 昔より人皆の三わとて調ふ法とも 謎の
三わにかゝるいと 姉あれい 密に呉ふへき事也

一

ぬけも 雲の 忍ちる 古刀の一系切 長良
形つ矣の根に 強き 枯風 定徳
冷しき 石いさあら 手に似て 翁

コハ近宝の作也 翁書て三和の格を立ひたるを
を志ゝしめむと実に出す

翁

貝不二や五月晴く二つの振 ソ重
荻さらけもさらしる 露沾
○鷺乃子社宮茂に爪の雪りて 翁

コノハ
元祿七
五祖

春立や蜜朶に止る神矢の根 許六
万嶋乃中に 觴 木守
斜日に斗の田鞍のうけひて 朱廸
大谷の水のひきや きそ始 り由
うゝ来 那る六尺人の朝や 六
本美ゝ吉田に帰や残るらむ 黄逸
侍者の京社一字や年始 、
さら波めるむ弄才天 翔 廸
平城の屯に春の花見えて 由
初空や大んなる不二の鷺 廸
年のふりを帰る門松 徐才
完領おふ鶴ゝ蝶みのあるゝ 六

大福の茶い越前の始も 才
和花 翁に れむ遠方の文 逸
三月に実の足程 遠り入て 等

翁曰 彦根の五和 勢にのつとり世上の人を嫌侮しき
勇体あつれ風雅の武士の手ひさく 嬉

ヘンツキ
元祿十
三ノ内

徒の字に声なきもよし玉の表 由
子ゝくり寺 正月の時 廸
万合若の跟の語も雪倍て 六
○

新山
大原三此
才三

老もしとや平苗より見るちの門 キ角
老のふ年ふ春尾の下蔭 文リン
宗世の名をもて峯の月晴て キ風
源採い木のうれ 早乃光ゝ 、
水れの羽青をぬる山の 角
宋人に云とふ宗祇何やらむ リン
菱萬蕃 哀に呉の笠ゝ 、
歌の投を折葉うる声 風
橋井ゝ松を家にうひねして 角

山コト
佐野
俊恵
原和
成雅

傍勢ヲ志ニ樓ニ多の隔洛ル　足勢
強くなり　柳社　紫衣　凉ト
さるも此あと戸ニ月を高ふて　青ル
草のそ社親ニ告よ我の月　ト
きれんな宣ヲ初ムまた　ル
白雲のむ社芙蓉を手ニ居て　勢
振揉ヲも葉の襟や秦笠髪　ル
と青の月ニ扇ニ汚もり　勢
小根ゟ秋木二俵お出ニ　ト
草直松の図あり　文直上略
あらう手の玉俵や此代の初角力　持祖
采屋い花ニ多ニあ西　桶　里和
山の井社青の雲仍なり
此方ニの歌い万人の中ニて五三人も志ニ人ニ
ニ心ニ貴拾ル撰志ニ入ニ此ニ之ニ祖重て
ヲ伝ヲ下し茅殿も同時仕ヲ
十月廿七　足勢
幸ニ平拾

▲掲を能采屋の宴と見立徭の文句をたち入ニより
をこゝまきは此文通幸ニ平いゝ答ル

□六句表

冬　フいゝニ見とつまあ牛をこ川あれ　西宮
、　橋大ヲあふる枯原乃松　力今
ア木城州下志ニ髪を茶笠て　京五
、　桧笠ヲ宮をやつす和歌　ト玉
○白ゝ手ニ陰ゝ見む月の海　菊
庵ニ右ニをすゝ岐阜山　ヤ水
是表ニ地名を出ゝる始之何い三千化渭白話ニ達し

□本式十句表

□ヤ　表十句ハ十句の大数ヲして表ニ世ニあらせる
事を嫌す但神祇の句ニ神祇の掲状述懐意
ホの句も右ニ同し若の句ニハ第三ニ神祇月
ニ意花ニ釈ホを時の宜ニ見合つゝるべし
フ松杉ニすゝひ上ゝる　夷ゝ　去来
、　ゝ手面白ゝ浮るたそゝれ　浮六

カイ卿一

コ神　ひくすらにねたる雲の下風煙　翁
　さんおおりも四五年の内　ソラ
○吹たれて浴い踊の月丸く　千那
ア　橋を押てのある初汐　末
、いまし網を寸法をきめの雖ゑ　六
　あゝ笠無にいるい何なし　翁
神△神的乃花千鞍を冥うせて　ラ
ハ　天ゝ言れと地もたんなく　那

▲老の本式の表い名本所当事なるを云い表わの仕立なるなに老中に系わを弱くるのもなり寸付方に曲音を受くより

三千△今日や名へも花も洞の日　木因
花鳥ハ　其鳥も其雲に追し　独
、大津恵の夜い又玄鳥笠にきて
ナ　起てあらりの山おとゝきた
、手拭に南夫白く吸ゝなれ
　ようゝと老人背でちやぶ好

○一いひき見て紙燭に菓と月
隠名ア　菓子は平仙に声落るし
、尺、極楽の杖自たせて茎二房
、　四十雀より五十力仙を
却て三わ表わまい曲音自生に毎篇むやるなりし
仮令神尺意名本木を出すとも付机の曲音なく
ていたの裡を見ることくして表わとい号ゝさうむ
又系わ百なくとも其活あらい恒に表わなるむ
行志頂門上に一隻眼を開て必仏祉の和粉に
飛れす祖々の骨髄を透ひすべきなるなむ

△八句表

要 此表に神祇あり尺数あり恋無常を捨す名本をいひ
人名をいふまい一連の始終を定に約といふんなりし
▲上の文々日松杉表木を挑とせし八句表の始し
是を表合は八百句の配を表に合すといふんし
こゝより表なれば月一所出す定なれとも月と花と出

こゝもあり勿論変格物なれい花才之已下に出
てもよし但月花ともに八句目にいや等又俗
なりて異なる他キの月出杖キなきもあり云々
杖ハ一季当流ゝるも云キまて八句季詰なるも
然て千変万化之多例西花葉なむ葉に出たり
西花 ア相のもれ後先におく扇ゝ子 樫夷
○ 西にねこふ雪の乃乃月 洞翠
コ ア新居もまやゝぬ株下杖れて 支考
ゝ しの橋も風に吹るし 松風
砂川に元弘ゝる日乃光 砂角
尺 葉跡の年加たひ人につく 雲冷
△ まん既も名不とかて花の去 成也
ハ 丁明降る 残雪乃山 水流

名手 許去の以る不も一理あり仮去杖支考氏解り
たひねて邦亡と表合あり我に語て白元表合ホ
の仙社を最高の方位自句とかなるべし表の内に

一老の姿をまめて去猫も猿に用ましきこゝろとなり
一臣面白ゝるべし答ぬ二子の支許先跡を盡て歩盡る
ゝるゝや又古来の法式ゝや二子の発明様に合ゝるに
やと追て思ふに古法跡伝ふよりは詮に及ず若
一巳の又翁にあらはいゝ伝ふむ只一時の風流にさも
あるべし法式を立むは於ける下先跡おゝ古法を破
新式を定めるゝは制を省きこゝろを弘めて句ゝ
秀逸多ゝむこゝろを斗ゝ之者に門人に語のへは
歩ゝ立てる人もあらむ猿とも古実を編べす妄
に破りゝるなし今二子のたゝく法を定めむ
三ゝ様に一理屋に除て都て後人の害なくむる
除く先跡の旨を見ゝし志るべきこゝろ
▲去来氏詮を出しは元祿十二の去ると上木せらは八
十年後安永七之其月宮を立てあるうち氏一臣
いさうしら人の巳ゝ邦人もて去来の原文を出せけ
るおゝむ芭蕉談下もさるゝあるを七部婆心